百済の都出土の「連公」木簡

韓国・扶餘双北里遺跡一九九八年出土付札

平川 南

"Muraji-no-Kimi" Wooden Tablet Excavated from Paekche's Capital : 1998 Korea, Buyeo Hyeonnae-ri Site Excavation Baggage Tag

HIRAKAWA Minami

はじめに
❶釈文
❷表記
❸「那尓波連公」と人名のみを表記した付札の類例
まとめ

[論文要旨]

百済の都の東北部・扶餘双北里遺跡から出土した木簡は、「那尓波連公」と人名のみを記した物品付札である。本木簡の出土した一九九八年の調査地は、百済の外椋部とよばれる財政を司る役所の南に展開する官衙と考えられる一帯であり、白馬江の水上交通を利用した物資の集積地の一角であったとされている。

「那尓波」は〝難波〟を指し、当時難波は対外交流の玄関口であり、外交にたずさわる人々は、ウジ名または名に難波を好んで用いた。

一般的には、「連公」は文字通り「連＋公」、「公」は尊称と解されている。しかし、奈良県石神遺跡木簡は「大家臣加□」などの人名とともに、「石上大連公」と連記され、『先代旧事本紀』・『新撰姓氏録』では連にのみ公が付されていることから、「連公」のみが連に対する尊称という解釈を下すことはできない。おそらくは「連公」はのちの天武八姓（六八四年）の「連」の前段階のカバネ表記であったと考えるべきであろう。木簡の年代も、七世紀半ば頃とされる石神遺跡木簡や法隆寺命過幡「山ア名嶋弖古連公過命時幡」と同様の時期と考えられ、一九九八年の双北里遺跡の発掘調査の所見（七世紀半ば頃）と合致するものであろう。また八～九世紀に作成された史書・説話集・文書および時期は異なるが系譜書などの場合は、例外なく「連公」表記は氏姓・系譜の〝祖〟に限定されている。これらは、各氏族に伝わる旧記のようなものをもとに作成されたと考えられる。

本木簡は、七世紀半ば頃の倭国と百済との密接な関係からいえば、百済の都泗沘に滞在した倭系官人が作成した木簡という可能性もありえよう。しかし、本木簡は大きくは次のような三つの特徴を有している。①古代日本に数多く類例のある名のみ記した小型の付札である。②「那尓波」の表記は『日本書紀』に収載された古代歌謡にほぼ同じ「那你婆」とある。③「連公」は、古代日本における七世紀半ば以前のカバネの特徴的表記である。

以上から、倭国で作製され、調度物などに付せられた荷札が物品とともに百済の都にもたらされ、札がはずされた可能性の方がより高いであろう。

いずれにしても、倭人（日本人）名を記載した木簡がはじめて古代朝鮮の地で発見されたことの意義はきわめて大きい。

【キーワード】「連公」、韓国扶餘双北里遺跡、人名のみの付札、那尓波（難波）、カバネ表記

はじめに

本木簡は、国立昌原文化財研究所『韓国の古代木簡』（二〇〇六年）に次のように報告されている。

忠清南道扶餘郡扶餘邑双北里遺跡は、泗沘都城内にある錦城山の北東斜面に位置している。ここは泗沘時代に都城の中心地域と現在の公州、論山地域をつないだ重要な交通路として知られる。

一九九八年、双北里一〇二番地一帯の宅地造成のため、忠南大学校博物館による発掘調査が実施され、調査の結果、泗沘時代の生活遺跡とともに高麗時代の垣根ならびに多数の遺構が確認された。

木簡が出土した調査地域のA地点では、時期の異なるふたつの低湿地泥土層が確認された。そのうち、表土下三m内外に形成された時代の先行する泥土層からは、百済時代の水路、井戸、建物の基壇と推定される石列遺構などが露出した。

水路の内部および周辺からは、木簡、漆器をはじめとする多様な木製品と「月廿」「舎」「大？」と刻まれた百済時代の銘文土器片、印章紋の押された瓦片、瑪瑙製装身具などが、各種の種子ならびに動物の骨とともに出土した。

特に水路周辺の有機物堆積層からは、完形の木簡一点と若干破損した木簡一点、目盛の間隔が約一・五cm程度の木製尺が収集されている。この木簡に書かれた文字は判読が難しい状態であるが、木簡が主に官庁や都城内の主要施設から出土した点を勘案すると、七世紀半ばを中心年代とする双北里遺跡から確認された建物址ならびに関連施設の性格をある程度推測することができる。

本木簡については『韓国の古代木簡』に採録されていたが、韓国国立扶餘博物館が再検討し、同館『百済木簡』（二〇〇八年）によれば、「那□内連公」と釈読し、さらに同博物館の李鎔賢氏は「連」を日本のカバネと解し、日本人名を記した木簡ではないか、と述べた（「朝鮮日報」二〇〇九年一月九日付）。しかし、木簡の完全な釈文とその性格が明らかではなく、「連」のみを手がかりに日本（倭）人名と解したために、日本国内にも日本語版が報道されながら大きな反響を呼ぶまでに至らなかったのではないかと考えられる。

小稿は、本木簡の完全な釈読とその性格を明らかにし、その歴史的意義を問うものである。

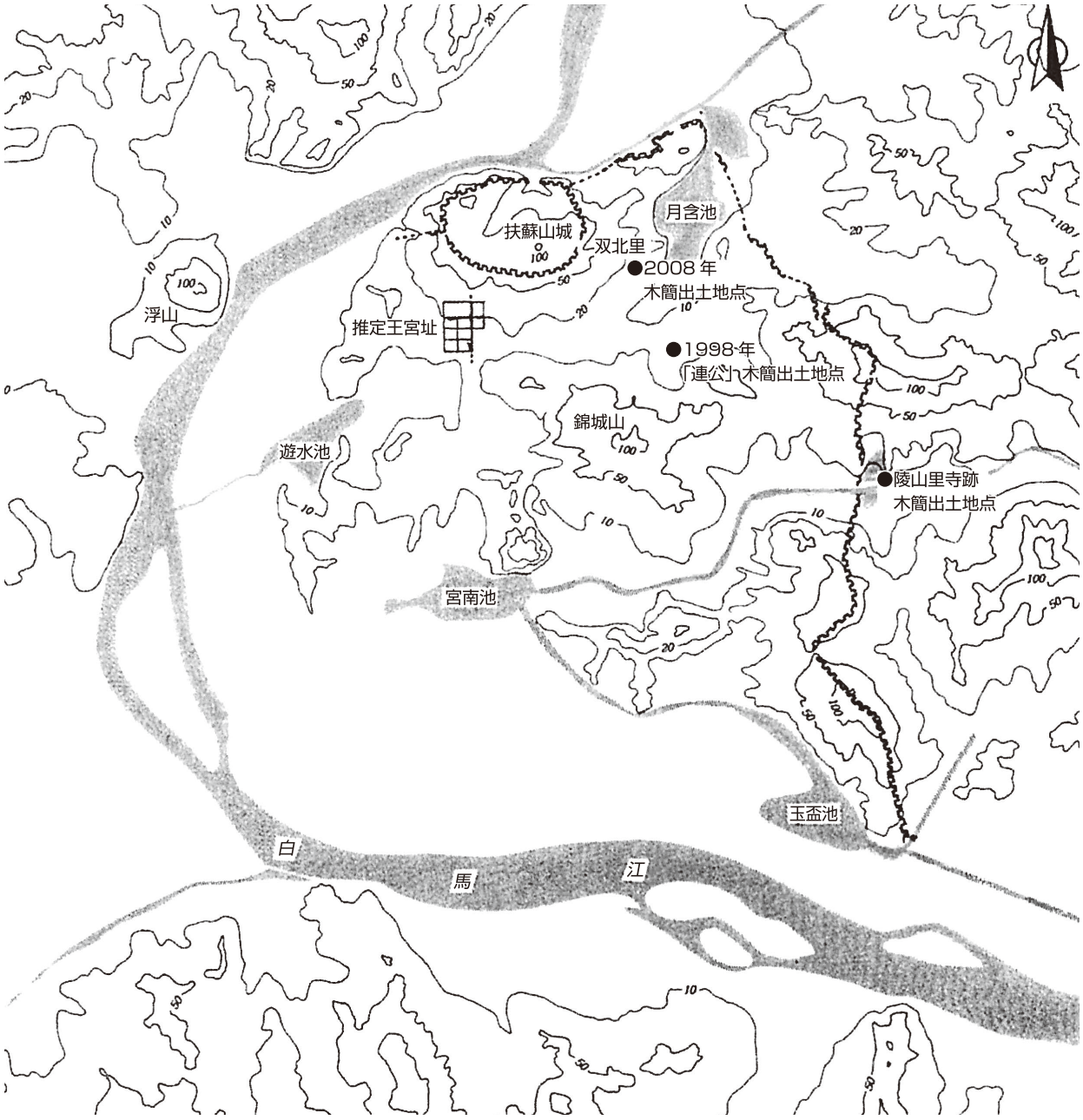


図１　泗沘都の地図と木簡出土地点
〔原図は『百済泗沘時期文化の再照明』　2005年〕

❶釈文

「〈那尓波連公」

一二一×一七×八㎜（以下略）

図３　文字部分の筆者による摸写
〔『韓国の古代木簡』　国立昌原文化財研究所　2006年に収載の実物写真資料からの模写〕

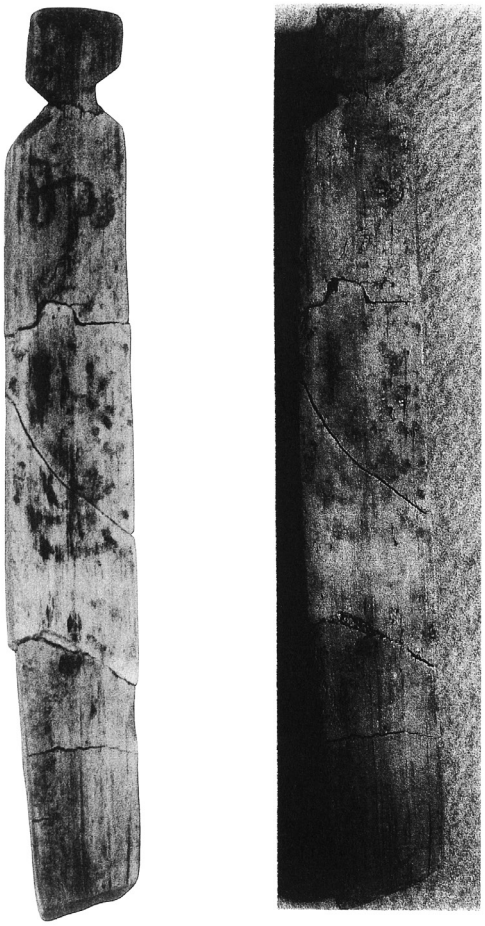


図２　木簡の実物（右）と赤外線写真（左）
〔『韓国木簡展』図録　国立扶餘博物館　2009年〕

第一字目は「那」と釈読してまちがいない。

なお、「那」の七世紀代の用字および字形の類例は、大宰府跡出土の墨書土器「那ツ支」（菜坏）などがある。

図４　「那ツ支」の墨書土器
〔『大宰府史跡　昭和59年度発掘調査概報』九州歴史資料館　1985年〕

第二字目は本木簡のなかで、墨痕の残りが最も悪い。しかし墨痕が失われ、やせ細った残画ではあるが、平城宮第二次内裏ＳＫ八二〇土壙出土木簡に類似した字形を見出すことができ、[1]「尓」と判断される。

第三字目も部分的に字画が失われているが、同じく平城宮木簡の中に類例がみられ、[2]「波」の字体の特徴的なものと判断される。

「尓」の字形

〔平城宮木簡〕

〔『五体字類』〕

「波」の字形

〔平城宮木簡〕

〔『五体字類』〕

図５　「尓」と「波」　類似した書体例
〔『平城宮木簡』一　奈良文化財研究所　1969年。『五体字類』〕

第四、第五字「連公」は全く釈読に問題はない。以上の検討結果から本木簡は「那尓波連公」と釈読することができるであろう。

❷表記

①「那尓波」

「那尓波」は、〝なには〟すなわち「難波」のことである。難波の表記はよく知られている歌木簡「なにはづに　さくやこのはな　ふゆこもり　いまははるへと　さくやこのはな」の場合には「奈尓波都尓佐久夜己乃波奈…」となる。

ここで『日本書紀』欽明天皇二十三年七月条に収載されている歌謡に注目してみたい。

愴然而歌曰、柯羅倶尓能、基能陪你陀致底、於譜磨故幡、比例甫囉須母、邪魔等陛武岐底。或有和曰、柯羅倶尓能、基能陪你陀々志、於譜磨故幡、比礼甫囉須弥喩、那你婆陛武岐底。

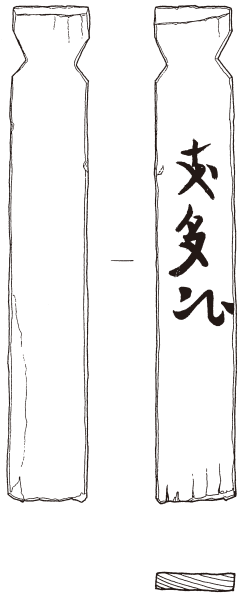
愴然みて歌ひて曰はく、
韓國の　城の上に立ちて　大葉子は　領巾振らすも　日本へ向きて
或有和へて曰はく、
韓國の　城の上に立たし　大葉子は　領巾振らす見ゆ　難波へ向きて
〔岩波書店、日本古典文学大系〕

「難波」という地名が「那你婆」と記され、本木簡の「那尓波」とほぼ同様の表記といえる。「な」の表記には「奈」を充てることが多いが、「那」でも問題はない。[3]

〔参考〕**七世紀半ばの固有名詞（物品名）の一字一音表記例**

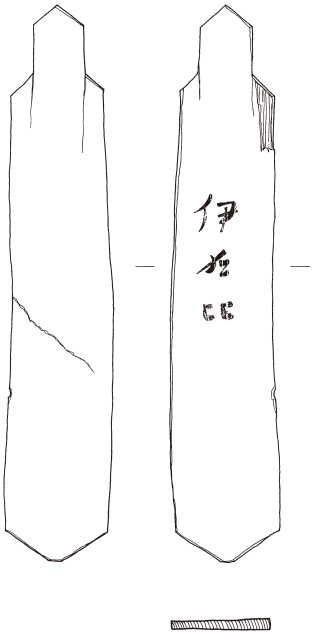
「難波」を「奈尓波」「那尓（你）波（婆）」などと一音ずつ表記しているが、こうした固有名に対する一字一音表記は七世紀に多くみられる。

図6・7難波宮跡（前期難波宮）出土木簡[4]二点（前期難波宮跡の北西部の谷から出土したもの）



一〇七×一七×四　〇三二

図6　「支多比」



一四六×二八×三　〇三二

図7　「伊加比」

〔『大阪府警察本部庁舎新築工事に伴う大阪城跡発掘調査速報　難波宮北西の発掘調査』大阪府文化財調査研究センター　2000年〕

図6の「支多比」は『和名類聚抄』魚鳥類で、「木多比」と表記する「腊」のことである。

図7の「伊加比」は『和名類聚抄』亀貝類でも同じ表記で、「貽貝」のことである。

②「連公」

(1)七世紀代の墨書銘幡・木簡にみえる「連公」

イ．法隆寺命過幡[5]

「山ア名嶋弓古連公過命時幡」

狩野久氏によれば、命過幡の干支年号は、例えば「己未年十一月廿日　過去尼道果／是以児止与古誓願作幡奉」の「己未年」は斉明五年（六五九）、「辛酉年」は斉明七年（六六一）、「癸亥年」は天智二年（六六三）に比定することが可能であると指摘している。また、この「山部、名嶋弓古連公」などという文章表現は、辛亥年（白雉二年＝六五一）の法隆寺献納御物観世音菩薩立像の銘文にも「辛亥年七月十日記、笠評君、名左古臣、辛丑日崩去」とあるように、七世紀代に特徴的なものであるという。[6]

ただ、この狩野氏の見解について、東野治之氏は干支年号を六十年新しい年代を比定するという異なる説を提示している。[7]

東野氏は「法隆寺献納宝物の銘文」〔東京国立博物館『法隆寺献納宝物銘文集成』一九九九年〕においても、「山ア名嶋弓古連公過命時幡」の資料解説には、「法隆寺裂。やはり七世紀末～八世紀初めのものと考えられる。「山部、名は嶋弓古連公」は、敬意を表わした表記で、『日本霊異記』（巻上、五）にみえる「大部屋栖野古連公」といった人名表記と共通する特徴を示す」としている。

なお、法隆寺命過幡には、「山部連公奴加致児恵仙命過往□」のように「ウジ名＋連公＋名」という表記のものも含まれている。

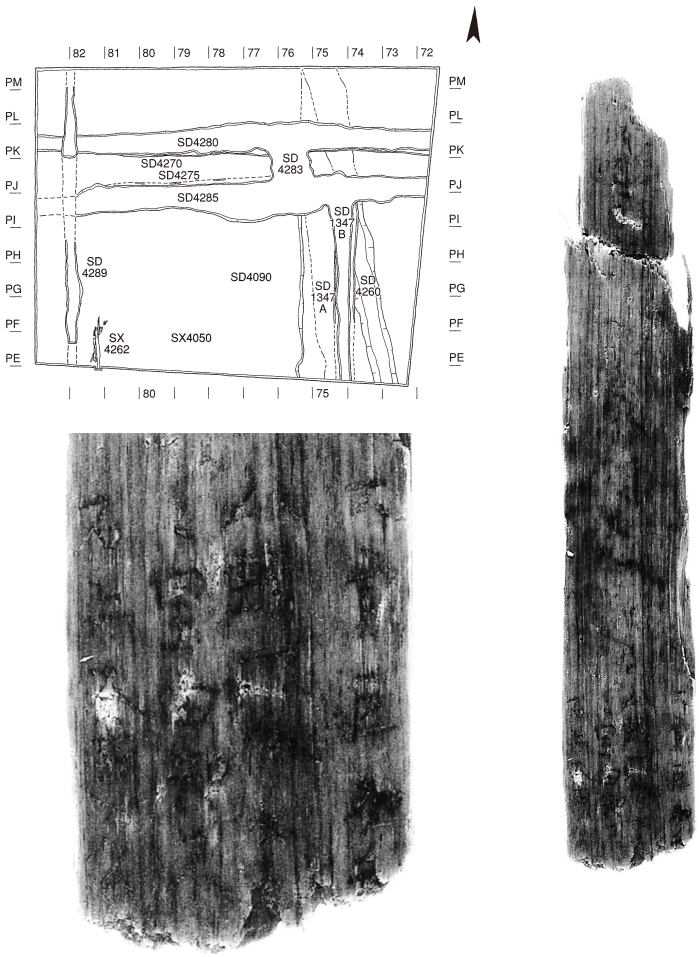


図９　「石上大連公」　石神遺跡出土木簡
〔『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』(22)
奈良文化財研究所　2008年〕

図８　法隆寺命過幡
〔『法隆寺献納宝物銘文集成』
東京国立博物館編
吉川弘文館　1999年〕

ロ．奈良県石神遺跡出土木簡(8)

□　□「大家臣加□」(刻書)
□百代五十代□　以蛭ア今女□
□歩□大百代□　乙里田知不
□□□□□　石上大連公」
(二八六)×(四八)×五　〇八一
三片分離。四周欠損。

この木簡は、「大家臣加□」などとともに「石上大連公」と人名を列記している。名としての石上の例は、「秦石上」(『大日本古文書』巻二三―五九八・三嶋子公解)などがあり、「石上」はウジ名か名かの問題が残るが、人名を列記する中で連のみに尊称がついたとは考えにくく、「連公」でカバネ的な表記であったと考える方が妥当であろう。

(2)八～九世紀代に作成された史書・系譜書・説話集・文書等にみえる「連公」

イ．史書

『先代旧事本紀』巻第五　天孫本紀

七世孫建膽心大禰命。（中略）弟大新河命。此命。纏向珠城宮御宇天皇御世元為大臣。次賜物部連公姓。則改為大連。奉斎神宮。其大連之号始起此時。（中略）弟十市根命。此命。纏向珠城宮御宇天皇御世賜物部連公姓。元為五大夫一。次為大連奉斎神宮。勅物部十市根大連曰。（中略）

八世孫物部武諸隅連公。新河大連之子。（中略）弟物部大小市連公。（小市直等祖。）弟物部大小木連公。（佐夜部直。久奴直等祖。）弟物部大母隅連公。（矢集連等祖。）已上三連公。志賀高穴穂宮御宇天皇御世。並為侍臣供奉。（中略）

十七世孫物部連公麻侶。馬古連公之子。此連公。浄御原朝御世。天下万姓改定八色之日。改連公賜物部朝臣姓。同朝御世。改賜石上朝臣姓。

饒速日命の七世孫である大新河命は、纏向珠城宮御宇天皇（垂仁天皇）の時に大臣となり、次いで「物部連公」を賜姓されて大連となった。同じく十市根命は垂仁天皇の時に「物部連公」を賜姓され、元は大夫であったが、次いで大連となっている。八世孫の物部武諸隅連公以降の世代はほぼ「物部○○連公」を称しており、十七世孫の物部麻侶連公が天武八姓の「朝臣」を賜姓されるまでカバネは「連公」であった。

『日本三代実録』巻第五　貞観三年（八六一）八月十九日庚申条

十九日庚申。左京人散位外従五位下伴大田宿祢常雄賜伴宿祢姓。先是。正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿祢善男等奏言。常雄欵偁。謹稽家諜。伴大田宿祢同祖。金村大連公第三男狭手彦之後也。狭手彦。宣化天皇世。奉使任那。征新羅。復任那。兼助百済。欽明天皇世。百済以高麗之寇。遣使乞救。狭手彦復為大將軍。伐高麗。其王踰城而遁。乗勝入宮。尽得珠宝貨賂。以献之。礒城嶋天皇世。還来献高麗之囚。今山城国狛人是也。狭手彦再使海外。征伐両国。尽力絶域。復立二国。身尊当時。功流後代。但古人朴質。除両国尽力非私。皆賜別姓。是以子孫不得大部。別賜大田宿祢。而狭手彦之弟阿彼布古。承父為大部連公。自斯而後。恐子孫之不広。無復更賜別姓。今阿彼布古之後。歴代尊顕。而狭手彦之後。挙朱紱者。曠世無聞。一祖之枝。栄枯殊隔。沉淪之歎。告訴無止。常雄幸逢昌泰。新参花轂。門蔭中興。寔為栄慶。刊大田両字。同帰於一宗。然則外不辱功臣之序。内方敦孔懐之親。善男等伏撿家記。所陳不虚。請刊彼両字。直賜宿祢。控其支孤入此本源。従之。

左京人の伴大田宿祢常雄は、家諜（家牒、家の系図）によれば伴大田宿祢は伴宿祢と同祖で、伴金村大連公の三男狭手彦の後とあると主張している。また、伴善男らの祖である狭手彦の弟阿彼布古は、父から「大部連公」の姓を受け継いだとしている。

ロ．系譜書

『新撰姓氏録』[9]

（左京神別中）

大伴宿祢

高皇産霊尊五世孫天押日命之後也。初天孫彦火瓊々杵尊神駕之降也。天押日命。大来目部立二於御前一。降二乎日向高千穂峯一。然後以二大来目部一。為二天靫部一。靫負之号起二於此一也。雄略天皇御世。以二入部靫負一賜二大連公一。奏曰。衛門開闔之務。於レ職已重。

若有二一身難一レ堪。望与二愚兒語一。相伴奉レ衛二左右一。勅依レ奏。
是大伴佐伯二氏。掌二左右開闔一之縁也。
佐伯宿祢
大伴宿祢同祖。道臣命七世孫室屋大連公之後也。（中略）
神松造
道臣八世孫金村大連公之後也。
（左京神別下）
石作連
火明命六世孫建真利根命之後也。垂仁天皇御世。奉二為皇后日葉酢媛命一。作二石棺一献レ之。仍賜二姓石作大連公一也。
檜前舎人連
火明命十四世孫波利那乃連公之後也。

大伴宿祢・佐伯宿祢などは、ともに室屋大連公の後とし、神松造は金村大連公、檜前舎人連は波利那乃連公の後とする。また、その表記型式は、賜姓の場合は、石作連のように「賜二姓石作大連公一」となるが、姓氏の系譜の祖は、例えば大伴大連室屋を「室屋大連公」とするように、すべて「名＋大連公（連公）」と表記している。

『古屋家家譜』（甲斐国一之宮　浅間神社所蔵）[10]

大伴氏の古系譜とされる『古屋家家譜』では、仲哀天皇に靫大伴として供奉した建持以降、七世紀後半までの人名は「名＋大連公（連公）」と表記されている。この表記について溝口睦子氏は、「連系の氏の古い本系をみると、物部氏の本系や中臣氏の本系にみられるように、「連公」と記すのがどうやら本系における正式の表記であったようである」と解している。[11]

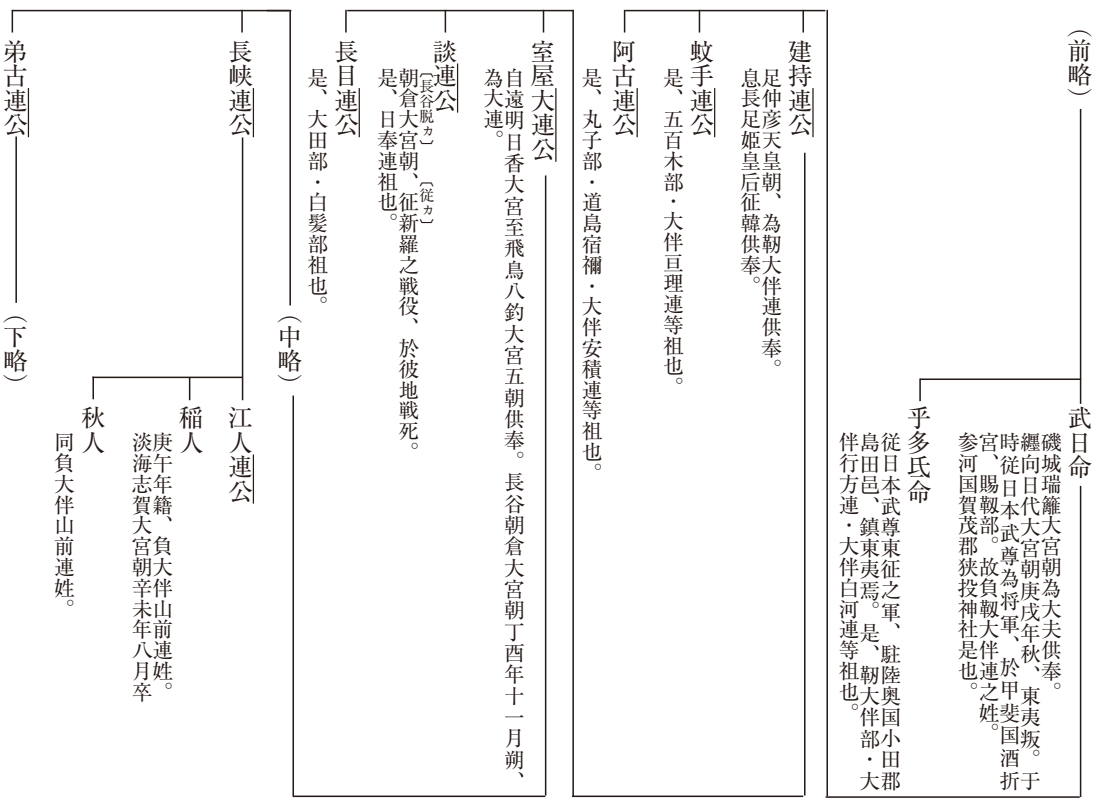


図10　古屋家家譜（甲斐国一ノ宮　浅間神社所蔵）
〔『山梨県史』資料編3　山梨県　2001年〕

ハ．説話集

『日本霊異記』上巻　三寶を信敬し、現報を得る縁　第五

大花位大部屋栖野古連公者、紀伊国名草郡宇治大伴連等先祖也。天年澄情、尊重三宝。案本記曰、敏達天皇之代、和泉国海中有楽器之音声、如笛箏琴箜篌等声、或如雷振動。昼鳴夜耀、指東而流。大部屋栖古連公聞奏、天皇嘿然不信。更奏皇后、聞之詔連公曰、汝往者之。奉詔往看、実如聞有当霹靂之楠矣。還上奏之。泊乎高脚浜。今屋栖伏願応造仏像焉。皇后詔、宜依所願也。連公奉詔大喜、告嶋大臣以伝詔命。大臣亦喜、請池辺直氷田雕仏、造菩薩三躯像、居于豊浦堂、以諸人仰敬。然物部弓削守屋大連公、奏皇后曰、凡仏像不可置国内、猶遠退。皇后聞之、詔屋栖古連公曰、疾隠此仏像。連公奉詔、使氷田直蔵乎稲中矣。弓削大連公、放火焼道場、将仏像流難破堀江。然徴於屋栖古言、今国家起災者、依隣国客神像置於己国内。可出期客神像。速忽棄流乎豊国也。〈客神者仏神像也。〉固辞不出焉。弓削大連、狂心起逆謀傾窺使。（後略）

〔岩波書店、日本古典文学大系〕

『日本霊異記』上巻第五縁によれば、大伴連等の先祖を「大部屋栖野古連公」とするが、文中には「物部弓削守屋大連公」「弓削大連公」、「弓削大連」とそれぞれ同一人物に対して異なる表記もみられる。

ニ．文書

太政官符案（粉河寺文書、『平安遺文』三五三号）

太政官符　紀伊国司

応免除粉河寺所領鎌垣東西村四至内雑役等事

在那賀郡

四至〈東限椎尾水無川弁財天　南限南山峯　西限風社柴尾門川弁財天　北限横峯〉

右得彼寺去永延二年（九八八）十月廿日解�ં、謹案旧記、此地白粉流水、時現神変之相、黄笠放光、屡示希有之瑞、点処而発願、結柴而構庵、未及人間之力功、顕紫磨金之尊像、以之称粉河寺、以之号自然仏矣、于時大伴連公孔子古奉為公家、以去宝亀年中所奉造也、

（中略）依請者、国宜承知、依宣行之、符到奉行

正暦二年十一月廿八日　従五位上守左少弁藤原朝臣説教（孝）

正六位上右少史物部宿禰

（下略）

永延二年（九八八）十月二十日の解文には、旧記によれば「大伴連公孔子古」とあり、「ウジ名＋連公＋名」という記載がある。

以上の「連公」に関する諸例を検討した結果、次の三点の特徴が指摘できる。

① 「連公」はのちの「連」につながるカバネの前段階表記といえる。「連公」の場合は「ウジ名＋連公」と「（ウジ名＋）名＋連公」という二つの表記がある。上記の「連公」または「大連公」の諸例のなかには、法隆寺命過幡の「山部連公奴加致」、『新撰姓氏録』の「石作大連公」、『日本霊異記』の「弓削大連公」、太政官符案「大伴連公孔子古」などのように、「ウジ名＋大連公（連公）」、「ウジ名＋連公＋名」と記すものがあるが、比較的多い表記は「名＋連公（大連公）」とするものである。

② 「連公」の「公」は〝連〟にのみ付されていることに留意すべきである。管見の限り〝臣〟・〝君〟・〝造〟などのカバネに尊称の「公」が付されることはなく、『新撰姓氏録』では〝臣〟や〝君〟と同様に連公が使用されている。よって、カバネ〝連〟に尊称「公」がついた表記形式とは必ずしも言いがたい。

③「連公」の木簡などの実例は、現段階では七世紀半ば頃（奈良県石神遺跡出土木簡）に限られる。また八～九世紀に作成された史書・系譜書・説話集・文書の場合は、例外なく「連公」表記は氏姓・系譜の〝祖〟に限定されている。これらは、各氏族に伝わる家牒・本記・旧記のようなものをもとに作成された可能性があるものであり、古い表記がそのまま使用されたと考えられる。天武九年（六八〇）から、直・造・首など下位のカバネの氏族を連に格上げするなど、諸豪族に対する大規模なカバネの改姓という作業をふまえ、天武十三年（六八四）に八色の姓が制定された。

『日本書紀』天武天皇十三年（六八四）十月己卯朔条

冬十月の己卯の朔に、詔して曰はく、「更諸氏の族姓を改めて、八色の姓を作りて、天下の万姓を混す。一つに曰はく、真人。二つに曰はく、朝臣。三つに曰はく、宿禰。四つに曰はく、忌寸。五つに曰はく、道師。六つに曰はく、臣。七つに曰はく、連。八つに曰はく、稲置。」

よって、このことからも、「連公」は七世紀半ば以前の表記であり、七世紀後半の天武九年（六八〇）以降、「連」の一字表記に統一されたと考えられる。

この見解が七世紀半ばとされる石神遺跡出土木簡も含めて認められるならば、先に挙げた東野治之氏の法隆寺命過幡に関する見解、すなわち、干支年を狩野氏より六〇年下げ、さらに命過幡銘文「山ア名嶋弓古連公過命時幡」を七世紀末～八世紀初とする解釈は成り立ちがたいとすべきであろう。

❸「那尓波連公」と人名のみを表記した付札の類例

渡来系氏族である難波氏は、「難波吉士」を称し、七世紀後半、『日本書紀』天武十年（六八一）正月壬申条によれば、草香部吉士大形に「難波連」を賜い、天武十四年（六八五）六月甲午条によれば、「難波連」ら十一氏に「忌寸」を賜っている。

『日本書紀』安閑天皇二年九月丙午条

九月甲辰朔丙午、詔桜井田部連・県犬養連・難波吉士等、主掌屯倉之税。

『日本書紀』天武天皇十年（六八一）正月丁丑条

丁丑、天皇御向小殿而宴之。是日、親王諸王、引入内安殿。諸臣皆侍于外安殿。共置酒以賜楽。則大山上草香部吉士大形、授小錦下位。仍賜姓曰難波連。

『日本書紀』天武天皇十四年（六八五）六月甲午条

六月乙亥朔甲午、大倭連・葛城連・凡川内連・山背連・難波連・紀酒人連・倭漢連・河内漢連・秦連・大隅直・書連・并十一氏、賜姓曰忌寸。

ウジ名「難波連」は天武朝（六七二～六八七）以降の賜与であることから、「那尓波連公」は前述の「連公」が名の下に付く例と同様に「那尓波」が名であり、「名＋連公」と判断できよう。

実際に『日本書紀』には、「難波」を名とする例がみられる。

『日本書紀』欽明天皇三十一年（五七〇）四月条

是月、乗輿至自泊瀬柴籬宮。遣東漢氏直糠児・葛城直難波、迎召高麗使人。

『日本書紀』敏達天皇二年（五七三）五月戊辰条

二年夏五月丙寅朔戊辰、高麗使人、泊于越海之岸。破船溺死者衆。朝庭猜頻迷路、不饗放還。仍勅吉備海部直難波、送高麗使。

これらの例は、難波の名をもつ者が、高麗の使人に対する送迎などの外交関係に従事していたことを示すのであろう。人名が職掌に通じる同様の例は、例えば滋賀県野洲市西河原遺跡群出土木簡に「文作人石木主寸文通」とあり、職を世襲する場合に、職に関わる人名表記がありえたことが知られる。

人名のみを表記した付札の例としては、以下のものが挙げられる。

イ．難波宮跡（前期難波宮―七世紀半ば）出土木簡[12]

「〈委尓ア栗□□」　五九一×（一六）×二　〇八一

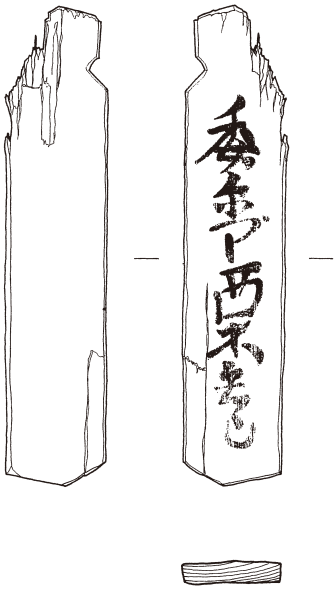


図11　「委尓ア栗□□」
〔出典　図6、図7に同じ〕

ロ．平城京跡・二条大路木簡[13]

①「〈山梨連大足」　九六×一三×五　〇三二
②「〈巫マ連真君」　八四×一八×二　〇三二
③「。東」　二七×一五×四　〇二二
④「〈上次」　三〇×一四×二　〇三二
⑤・「。秦万呂」
・「。山代乙」　三五×一六×三　〇二二

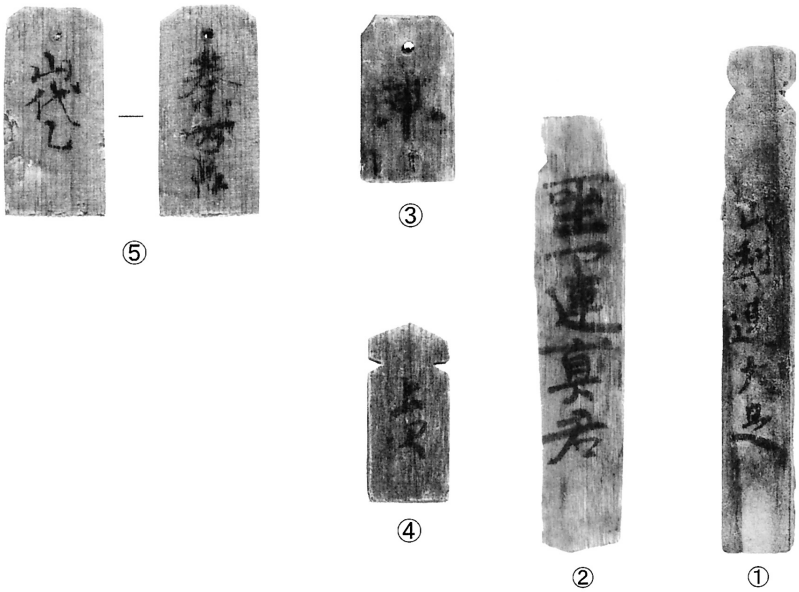


図12　人名のみ表記した付札（平城宮・京跡出土木簡）
〔『日本古代木簡集成』木簡学会編　東京大学出版会　2003年〕

①・②はともに人名のみを記した付札で、その用途は不詳。③・⑤はきわめて小さく、圭頭状にした上端に紐を通す孔をあける。⑤の表裏には人名が書かれる。

ハ．正倉院宝物銘文[14]

箭　二隻（第二二号）（中六）

（1）一隻（簪針書）「茨木」

（2）一隻（同）「日下マ佐（万呂）□□」

献物牌　五枚　並木造（中　六六）

（1）一枚「藤原朝臣袁比」（背）「良賣献舎那仏」

（2）一枚「橘夫人」

（3）一枚「藤原朝臣百能」

（4）一枚「尼信勝」

（5）一枚「尼善光」

献物牌　二枚　竝木造（中一〇八）

（1）一枚「従三位〈藤原朝臣吉日〉」

（2）一枚「橘少夫人」

献物牌　木造（中一二一）

「藤原朝臣久米」（背）「刀自賣献舎那仏」

イ・ロ木簡および正倉院宝物に付けられた献物牌などの類例からも、小型で人名のみを表記した双北里遺跡出土の「那尓波連公」木簡は、物品付札とみなすことができよう。

まとめ

一般的には、「連公」は文字通り「連＋公」で、「公」は尊称と解されている。『日本書紀』には「連公」という表記はないが、雄略天皇九年三月条によれば、大伴談（かたり）連が新羅で戦死した際、その従人が主の行方を尋ね「吾が主大伴公、何處に在します」と述べたとある。この「大伴公」が『古屋家家譜』にみえる大伴談連公を指すとすれば、公が尊称として連に付せられたいう理解もありうるかもしれない。事実これまでは、法隆寺命過幡や『日本霊異記』のウジの祖を語る時にみえる「連公」を尊称・敬称と理解してきた。

しかし、先に掲げた石神遺跡出土木簡の事例は「大家臣加□、以蛭ア今女□」などの人名とともに「石上大連公」と連記されている。また、『先代旧事本紀』や『新撰姓氏録』では連にのみ公が付され、他のカバネと同様に「連公」または「大連公」と表記されている。これらの諸例から判断すれば、「連公」のみが連に対する尊称という解釈を下すことはできない。おそらくは、「連公」は後の天武八姓の「連」の前段階のカバネ表記であったと考える方がよいであろう。

第三章で明らかにしたように、本木簡「那尓波連公」は人名のみを表記した物品付札と理解できよう。木簡の年代も、七世紀半ば頃とされる石神遺跡木簡「石上大連公」、法隆寺命過幡「山ア名嶋弓古連公過命時幡」と同様の時期と考えられ、一九九八年の双北里遺跡の発掘調査の所見（七世紀半ば頃）とも合致するものであろう。

最後に、本木簡が古代朝鮮の百済の都（扶餘）から出土したことの意義について述べておきたい。まず、七世紀段階における倭国と百済の関係は、年表形式で六四〇年以降を示すと次のようになろう。

六四〇年（舒明十二）　十月…留学僧清安・学生高向漢人玄理らが新羅を経由して帰朝。百済・新羅の送使が来朝し、朝貢。

六四二年（皇極元）　正月…百済に遣使していた阿曇連比羅夫が帰京。
二月…高麗・百済の客を難波にて饗す。
二月…高麗・百済使人帰る。
五月…百済国調使、吉士の船とともに難波に着す。調を進上する。
七月…百済使人大佐平智積ら朝貢。
八月…百済使参官ら帰る。
百済からの人質達率長福に小徳を授ける。

六四三年（皇極二）　四月…百済王子翹岐弟王子、調使と共に来朝。
六月…百済の調船、難波津に泊まる。
七月…百済の朝貢物を検校する。

六四五年（大化元）　是歳…百済豊章、蜜蜂を三輪山に放す。
七月…高句麗・新羅・百済朝貢。百済調使、任那の調も朝貢する。
百済の使に対し詔する。鬼部達率意斯の妻子を送遣する。

六四八年（大化四）　二月…三韓（高句麗・百済・新羅）に学問僧を派遣する。

六五〇年（白雉元）　四月…〔或本〕高句麗・百済・新羅の三国、年ごとに朝貢する。
是歳…安芸国にて百済船二隻を造船する。

六五一年（白雉二）　六月…百済・新羅朝貢する。

六五三年（白雉四）　六月…百済・新羅朝貢する。

六五四年（白雉五）　七月…西海使吉士長丹等、百済・新羅使とともに筑紫に泊まる。
是歳…孝徳天皇崩御により、高句麗・百済・新羅、遣使して弔い奉る。

六五五年（斉明元）　是歳…高句麗・百済・新羅、朝貢する。百済大使西部達率余宜受・副使東部恩率調信仁ら一百餘人が来朝。

六五六年（斉明二）　是歳…高句麗・百済・新羅、朝貢する。
西海道佐伯連栲縄回小山下難波吉士国勝ら、百済から帰朝。鸚鵡一隻を献上する。

六五七年（斉明三）　是歳…西海使小花下阿曇連頻垂・小山下津臣偃咋僂、百済より帰朝。駱駝一箇と驢二箇を献上。

六五八年（斉明四）　是歳…〔或本云〕庚申年七月に百済より遣使。唐・新羅からの侵攻を報告。
西海使小花下阿曇連頻垂、百済より帰朝。百済が新羅を伐って帰るときのことを報告。――百済滅亡の前兆とする

六六〇年（斉明六）　五月…国の百姓、故なく兵器をもって往還する。
七月…〔日本世記云〕春秋智（太宗武烈王）、蘇定方（唐の武将）の力を借りて、百済を滅ぼす。
〔伊吉連博徳書云〕庚申年（本年）八月、百済平定後の戦後処理。
九月…百済、達率・沙弥覚従らを遣使。
十月…百済佐平鬼室福信・佐平貴智らを遣使。
王子豊璋・妻子・叔父忠勝らを百済へ送

ることとする。

是歳…百済の要請により、新羅を伐つため、駿河国にて造船。

六六一年（斉明七）　四月…百済、鬼室福信を遣使し、上表。王子糺解（豊璋）をむかえることを請う。

また、「記・紀」についてみると、『古事記』は百済派遣氏族について記述するところがきわめて少ないが、『書紀』では六世紀代の継体・欽明・敏達朝の百済派遣氏族の記事が集中し、比較的多く派遣将軍・軍士あるいは遣使・在官者として名を留めている。

このように七世紀半ば頃の倭国と百済は、きわめて密接な関係を維持していたと考えられる。そして本木簡は、百済の都（扶餘）から出土したものであり、倭国と百済との密接な関係を前提としてはじめて考えられる。よって、百済国滅亡の六六〇年以降には想定しにくいとすれば、木簡の下限年代は六六〇年とし、それ以前とみることができるであろう。しかも、「那尓波」（難波）という名は、大和政権の海の玄関＝難波・難波津に由来し、その名（氏名も含めて）を冠する者はほとんど外交関係に従事しているのである。

したがって本木簡は、七世紀半ば頃の倭国と百済との密接な国際関係からいえば、百済の都泗沘に滞在した倭系官人が百済の地で作製した木簡という可能性もありえよう。しかし、本木簡は、すでに述べたように、大きくは次の三つの特徴を有している。

（1）人名のみ記した小型の付札は七世紀半ばの前期難波宮木簡などの古代日本の木簡に多くの類例を確認できる。

（2）「那尓波」の表記は、『日本書紀』に収載された古代歌謡にほぼ同じ「那你婆」の例がある。

（3）「連公」は、古代日本における七世紀半ば以前のカバネの特徴的表記である。

以上の（1）～（3）のような特徴をもった木簡は、倭国内でこそその有効性を発揮できると考えられる。おそらくは、倭国で作製され、調度物などに付せられた荷札が物品とともに百済の都にもたらされ、百済の外椋部[15]の所在地の南に展開する官衙と考えられる付近で札がはずされ、投棄された可能性がより高いものと判断できよう。今後、木簡の樹種同定も判断要素の一つとなるだけに、その結果も注目してゆきたい。

なお、倭国で作製され調度物などに付せられた物品付札とすれば、木簡ではないが、正倉院宝物の佐波理加盤付属文書が逆のケース（新羅→日本）としてあげられよう。

佐波理加盤は、そもそも佐波理という語の由来が新羅に求められており、それゆえ加盤もまた新羅の特産品であったとされている。加盤に付着していた文書は、もとは官僚の俸禄を司る新羅の官庁から払い下げられた反故紙と見られ、新羅の工匠府、あるいは宮廷工房で製造された加盤を荷作りする際に、包装紙などとして使用され、加盤とともに日本にもたらされたと推定されている。[16]

いずれにしても、倭人（日本人）名を記載した木簡がはじめて古代朝鮮の地で発見されたことの意義は極めて大きい。

末筆ながら、小稿を草するにあたり、仁藤敦史氏・中大輔氏・武井紀子氏には貴重なご教示・ご助力をいただいた。記して謝意を表したい。

註

（1）『平城宮木簡』一―七六九、奈良国立文化財研究所、一九六九年。
（2）『平城宮木簡』一―四一九、奈良国立文化財研究所、一九六九年。
（3）「ナ」「ニ」「ハ」音の表記については、以下の表を参照のこと。

	記歌謡	万葉集仮名巻共通	木簡の仮名書歌（なにはづ他）	金石文	仏足石歌	正倉院仮名文書
ナ	那	奈	奈／奈那	那奈	奈	奈
ニ	尓迩	尓仁	尓迩／尓（你）		尓	尓
ヌ	奴	奴			奴	奴
ネ	泥	祢		尼祢	祢	祢
ノ甲	怒	努		努	乃？	
ノ乙	能	能乃	乃能／乃能（之）	能	乃	乃
ハ	波婆　婆	波婆	皮波者（泊）／波皮	披半沛	波婆	波

乾善彦「歌表記と仮名使用」〔第三〇回木簡学会研究集会「歌木簡とその周辺」二〇〇八年〕発表レジュメ参考資料より作成。
（4）『大阪府警察本部庁舎新築工事に伴う大坂城跡（その6）発掘調査速報　難波宮跡北西の発掘調査』〔財団法人大阪府文化財調査研究センター　二〇〇〇年〕。
（5）東京国立博物館編『法隆寺献納宝物銘文集成』吉川弘文館　一九九九年。
（6）狩野久「法隆寺幡の年代について」〔法隆寺昭和資財帳編纂所『伊珂留我―法隆寺昭和資財帳調査概報3―』小学館、一九八四年〕。
（7）東野治之「法隆寺伝来の幡墨書銘―追善行事との関連にふれて―」〔小松和彦・都出比呂志編『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』大阪大学文学部、一九九五年〕。
（8）『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』（二十二）奈良文化財研究所　二〇〇八年。
（9）佐伯有清『新撰姓氏録の研究』本文篇 吉川弘文館 一九六二年。
（10）『山梨県史』資料編3（原始・古代3　文献・文字資料）　山梨県　二〇〇一年。
（11）溝口睦子『古代氏族の系譜』吉川弘文館、一九八七年。
（12）註（4）に同じ。
（13）それぞれ順番に①『平城宮発掘調査出土木簡概報』三一―一七頁下、②同三一―三二頁下、③同三一―三七頁上、④同二四―三二頁上、⑤同三一―一七頁下。
（14）松嶋順正編『正倉院宝物銘文集成』吉川弘文館　一九七八年。
（15）百済王都が扶餘に遷されたいわゆる泗沘期の百済の内朝は、『周書』百済伝などによれば内官十二部制に整備され、その十二部のなかに内椋部と外椋部が存在していたとされていた。ところで、二〇〇八年の双北里地区の発掘調査によって発見された第二号木簡に次のように記されている。

外椋ア鐵　八一×二三×六
代綿十両

これまで、中国の歴史書に記載があるのみであった「外椋部」の実在が、本木簡によって初めて立証されたのである。〔「扶余・双北里木簡」早稲田大学朝鮮文化研究所、大韓民国国立加耶文化財研究所『日韓共同研究資料集　咸安城山山城木簡』雄山閣　二〇〇九年〕
（16）鈴木靖民「正倉院佐波理加盤付属文書の基礎的研究」〔『古代対外関係史の研究』吉川弘文館 一九八五年 初出一九七七年〕。李成市『東アジアの王権と交易』青木書店、一九七七年。なお、佐波理加盤付属文書の釈文および文書の性格については鈴木氏の見解とは異なる解釈を別稿で提示する予定である。

（国立歴史民俗博物館館長）

（二〇〇九年七月一四日受付、二〇〇九年八月一九日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 153 December 2009

"Muraji-no-Kimi" Wooden Tablet Excavated from Paekche's Capital : 1998 Korea, Buyeo Hyeonnae-ri Site Excavation Baggage Tag

HIRAKAWA Minami

The wooden tablet excavated from the Hyeonnae-ri site in Paekche's northeastern capital Buyeo is a baggage tag inscribed with just the name of the person "Naniwa no Muraji-no-Kimi". The archaeological site where this wooden tablet was excavated in 1998 was a government office in an area south of the office which administered Paekche's finances, itself situated in a commercial hub which benefited from the use of the Penmagan waterways for the transport of goods.

"Naniwa(那尔波)" refers to "Naniwa(難波)". In those days Naniwa was the gateway to the outside world, and people involved with foreign diplomacy liked to use Naniwa as their first or family name.

Generally speaking, the meaning of "連公" (Muraji-no-kimi) is as the characters suggest: "連 + 公"— "Muraji" was a name used by the Yamato royal family and "kimi" is an honorific title. However, wooden tablets from the Ishigami site in Nara Prefecture feature inscriptions of names such as "Ohoyake-no-Omi KaXX" (大家臣加□) alongside "Isonokami Oo-Muraji-no-Kimi", while for "Sendai Kuji Hongi" and "Shinsen Shojiroku", "Kimi" is only ever attributed to "Muraji", making it impossible to interpret "Muraji-no-Kimi" solely as an honorific name relating to "Muraji". It is perhaps best to consider that "Muraji-no-Kimi" was an insignia from a previous historical stage to the "Muraji" of 684. The era of the wooden tablet can also be argued to be the same period as the wooden tablet of the Ishigami site and "Meika-ban" (ancient Buddhist banner) of Horyuji Temple, which are considered to be from the middle of the 7th century, which tallies with the observation of the archaeological excavation from the 1998 Hyeonnae-ri site (that it is mid-7th century). In the case of history books, literary collections and documents produced during the 8-9th centuries, as well as genealogical documents from different eras, the "Muraji-no-Kimi" insignia relates without exception solely to the family's nominal or genealogical "ancestor", so it can be argued that it was created as a kind of record to be handed down to each clan.

If one considers the close relationship between Japan and Paekche of the mid-7th century, the possibility would seem to exit that this wooden tablet was made by a Japanese official resident in the Paekche town of Sabi. However, the wooden tablet clearly exhibits the following three characteristics: 1. It is a small baggage tag with just a name inscribed on it, of which numerous other examples exist from ancient Japan. 2. The inscription "Naniwa" (那尔波) is more or less the same as the "Naniwa" (那你婆) which appears in ancient ballads collected in the "Nihon-Shoki". 3. "Muraji-no-Kimi" is a characteristic insignia of a name from before the middle of the 7th century in ancient Japan.

Taking the above into account, I would argue that there is a greater probability that the tablet was made in Japan, was attached to some commercial goods as a baggage tag and brought to Paekche, and that the tag became detached after arrival.

Whatever the case, there is enormous significance to the fact that for the first time a wooden tablet with a Japanese name inscribed on it was discovered at an ancient Korean site.

Keywords: Muraji-no-Kimi, Korea Buyeo Hyeonnae-ri site, tag inscribed with just a person’s name, Naniwa, insignia

백제 왕도 출토「연공(連公)」목간

한국 부여 쌍북리유적 1998년 출토 부찰

"Muraji-no-Kimi" Wooden Tablet Excavated from Paekche's Capital : 1998 Korea, Buyeo Hyeonnae-ri Site Excavation Baggage Tag

平川 南(히라카와 미나미)

橋本繁[譯]

HIRAKAWA Minami Translated : HASHIMOTO Shigeru

머리말

❶판독문

❷표기

❸「那尔波連公」과 인명만을 표기한 부찰의 유례

맺음말

[論文要旨]

백제왕도 부여의 동북부 쌍북리유적에서 출토된 목간은「那尔波連公」라는 인명만을 쓴 물품부찰이다. 이 목간이 출토된 1998년 조사지구는 백제의 외경부 는 재정을 담당한 관청의 남쪽에 있었던 관아로 생각되는 일대로서, 백마강 수상교통을 이용한 물자 집적지의 일부였다고 생각되고 있다.

「那尔波」는 "나니와(難波)" 를 의미하며 당시 나니와는 대외교류의 창구이며 외교에 종사하는 사람들은 씨족명이나 이름으로 나니와를 주로 사용했다.

일반적으로「연공(連公)」은 문자 그대로「連 + 公」,「공(公)」은 존칭으로 해석되고 있다. 하지만 나라현(奈良縣) 이시가미(石神) 유적 목간은「大家臣加口」등의 인명과 함께「石上大連公」이라고 표기되어 있어『선대구사본기(先代舊事本紀)』,『신찬성씨록(新撰姓氏錄)』에서는 연(連) 에만 공(公) 을 붙인 것으로 보아「연공」만이 연에 대한 존칭이라고 해석할 수 없다. 적어도「연공」은 뒤의 684년의 천무팔성(天武八姓) 의「연(連)」의 전단계인 카바네(カバネ)표기였을 것이다. 목간의 연대도 7세기 중엽경으로 생각되는 이시가미유적 목간, 법륭사 명과번(法隆寺 命過幡)「山ア名嶋弖互古連公過命時幡」과 같은 시기로 생각되어 1998년 쌍북리유적 발굴조사의 소견(7세기 중엽경) 과도 일치한다. 또한 8-9세기에 작성된 사서, 설화집, 문서 및 시기는 다르지만 계보서 등의 경우, 예외없이「연공」표기는 씨성·계보의 "조상" 에 한정되어 있다. 이는 각 씨족에 전해온 구기같은 것을 바탕으로 작성했다고 생각된다.

이 목간은 7세기 중엽경의 왜국과 백제의 밀접한 관계를 생각하면 백제왕도 사비에 있던 왜계관인이 만든 목관일 가능성도 있을 법하다. 하지만, 이 목간은 크게 다음의 세가지 특징을 가지고 있다. (1) 고대일본에 많은 유래가 있는 이름만을 적은 소형부찰이다. (2)「那尔波」표기는『일본서기(日本書記)』에 실린 고대가요에 거의 같은「那尔婆」로 되어 있다. (3)「연공(連公)」은 고대일본에서 7세기 중엽 이전 카바네(カバネ)의 특징정 표기이다.

이상에서 왜국에서 만들어 조도물(調度物)등에 붙인 하찰이 물품과 함께 백제왕도로 왔다가 폐기되었을 가능성이 더 높을 것이다.

그럼에도 왜인(일본인) 인명을 쓴 목간이 처음으로 한반도에서 발견된 의의는 매우 크다.

【키워드】연공(連公), 부여 쌍북리유적, 인명 뿐인 부찰, 나니파(那尔波), 나니와(難波), 카바네 표기

머리말

이 목간에 관해서는 국립창원문화재연구소『한국의 고대목간』(2006 년) 에 다음과 같이 보고되어 있다.

충청남도 부여군 부여읍 쌍북리유적은 사비도성안에 있는 금성산 북동기슭에 위치한다. 여기는 사비시대에 도성의 중심지역과 현재의 공주, 논산지역을 잇는 중요한 교통로로 알려져 있다.

1998 년 쌍북리 102 번지 일대의 택지조성과 관련하여 충남대학교 박물관에 의해 발굴조사가 실시되었고, 조사결과 사비시대의 생활유구과 더불어 고려시대의 담장 및 다수의 유구가 확인되었다.

목간이 출토된 조사지역인 A 지점에서는 시기를 달리하는 두 개의 저습지 진흙층이 확인되었고, 그 중 표토하 3m 내외에 형성된 선대 진흙층에서는 백제시대의 수로, 우물, 건물의 기단으로 추정되는 석렬유구등이 노출되었다.

수로의 내부 및 주변에는 목간, 칠기를 비롯한 다양한 목제품과「월입(月卄)」,「사(舍)」,「대(大)?」가 새겨진 백제시대 명문토기편, 인장문이 찍힌 기와편, 마노석제 장신구 등이 각종 씨앗류 및 동물뼈와 함께 출토되었다.

특히 수로 주변의 유기물 퇴적층에서는 완형의 목간 1 점과 약간 파손된 목간 1 점, 눈금간격이 약 1.5cm 정도되는 목제 자가 수습되었다.

이 목간에 쓰인 글자는 판독이 어려운 상태이나 목간이 주로 관청이나 도성내 주요시설에서 출토된 점을 감안해 볼 때, 7 세기 중반을 중심연대로 하는 쌍북리유적에서 확인된 건물지 및 관련시설의 성격을 어느 정도 짐작해 볼 수 있다.

이 목간에 대해서는『한국의 고대목간』에 채록되어 있었지만, 한국국립부여박물관이 재검토하여 동박물관『百濟木簡』(2008 년) 에서는「那□內連公」으로 판독하였으며 동박물관의 이용현씨는「연(連)」은 일본의 카바네(カバネ) 로 해석하여 일본인을 기록한 목간이라고 주장했다(「조선일보」2009 년 1 월 9 일). 하지만, 목간의 완전한 판독문과 목간의 성격이 명확하지 않아 연(連) 자만을 근거로 일본(倭) 인명으로 해석했기 때문에 일본에서도 조선일보 일본어판으로 보도되면서도 큰 반향을 일으키지는 못 했던 것 같다.

본고는 이 목간의 완전한 판독문과 그 성격을 밝히고, 역사적 의의를 검토하고자 한다.

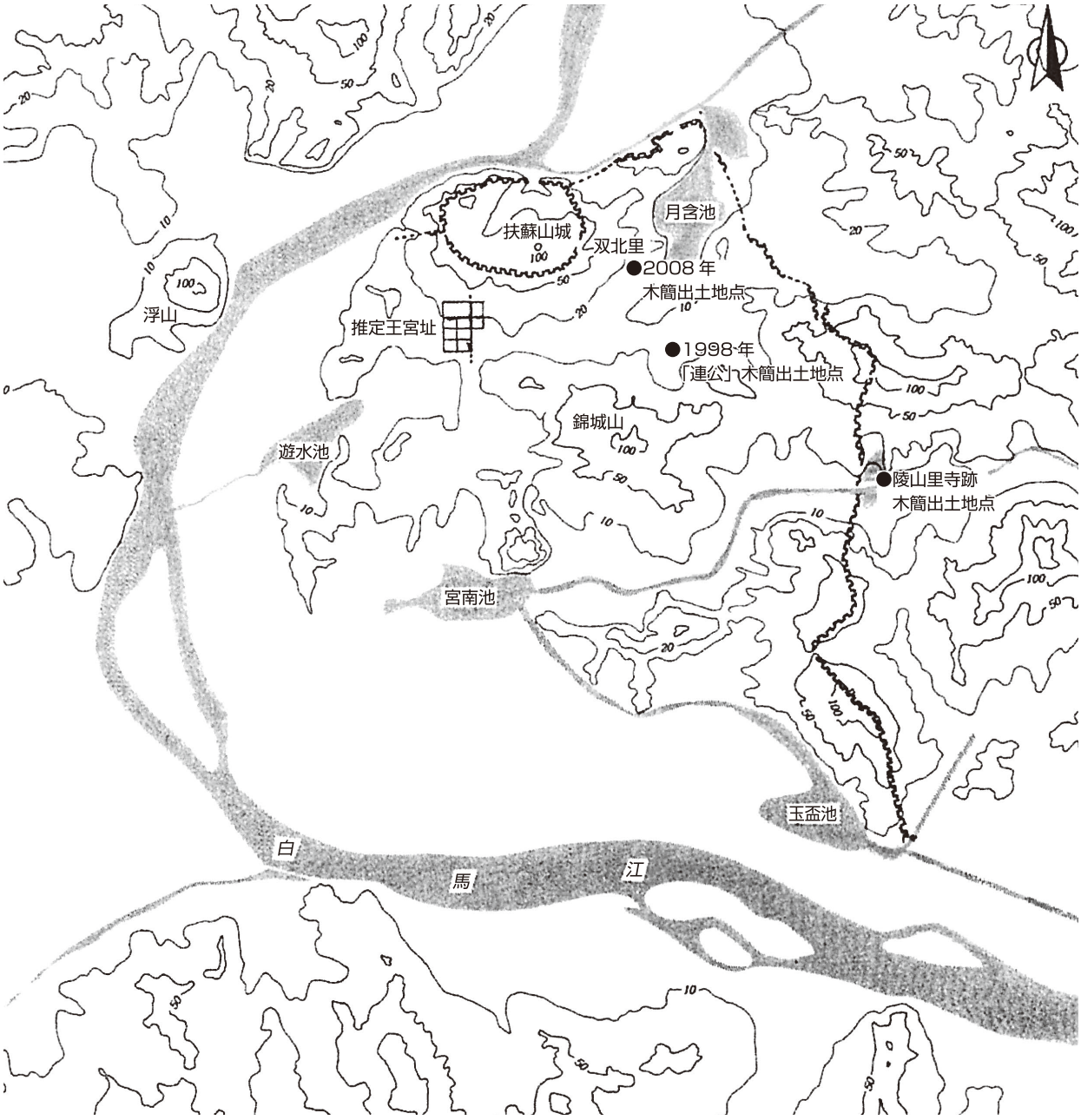


그림 1　사비도성과 목간의 출토지점 [원도는『백제사비시기문화의 재조명』, 2005 년]

❶……판독문

「＜那尓波連公」　　121 × 17 × 8mm（이하생략）

그림 2　목간의 칼라사진(오른쪽) **과 적외선사진**(왼쪽)
[『한국목간전』도록 , 국립부여박물관 , 2009 년]

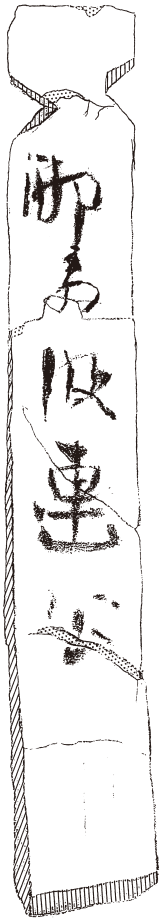


그림 3　문자부분은 필자에 의한 모사
[『한국의 고대목간』　국립창원문화재연구소 2006 년에 수록된 실물사진 자료를 토대로한 모사]

첫번째 글자는「나(那)」로 판독해야 할 것이 틀림없다.

그리고,「나(那)」의 7세기대 용자 및 자형의 유형은 대재부(大宰府)터에서 출토된 묵서토기「那ツ支」(나쓰키 = 菜杯) 등이 있다.

그림 4 「那ツ支」의 묵서토기
[『大宰府史跡 昭和59年度發掘調査慨報』九州歷史資料館 1985년]

두번째 글자는 이 목간에서 묵흔이 제일 잘 남아 있지 않다. 다만, 묵흔이 없어지고 희미한 자획이기는 하나, 평성궁(平城宮) 제2차 내리(內裏) SK820 토광출토목간에 유사한 자형을 찾을 수 있어[(1)],「이(尔)」로 판단된다.

세번째 글자도 부분적으로 자획이 없어졌으나 역시 평성궁 목간에 비슷한 예가 보이며[(2)],「파(波)」자의 특징으로 판단된다.

그림5 「이(尔)」,「파(波)」와 유사한 서체
[『平城宮木簡』1, 奈良文化財硏究所, 1969년 및 『五體字類』]

네번째, 다섯번째「연공(連公)」은 판독에 전혀 문제없다.

이상의 검토결과로 이 목간은「那尔波連公」으로 판독할 수 있다.

❷……표기

①나니파(那尓波)

「나니파(那尓波)」는「나니와 = 難波」를 의미한다. 나니와(難波) 의 표기는 잘 알려진 노래 목간「なにはづに　さくやこのはな　ふゆこもり　いまははるへと　さくやこのはな」의 경우에는「奈尓波都尓佐久夜己乃波奈…」로 표기된다.

여기서『일본서기(日本書紀)』흠명(欽明) 천황 23 년 7 월조에 실려 있는 가요에 주목해 보자.

> 愴然而歌曰, 柯羅倶尔能, 基能陪你陀致底, 於譜磨故幡, 比例甫囉須母, 耶魔等陛武岐底. 或有和曰, 柯羅倶尔能, 基能陪你陀々志, 於譜磨故幡, 比禮甫羅須彌喩, 那你婆陛武岐底.

「나니와(難波)」라는 지명이「나니파(那你婆)」로 표기되어 있어 목간의「나니파(那尓波)」와 거의 같은 표기라고 할 수 있다.「나」의 표기에는「奈」를 쓰는 경우가 많은데「那」로도 문제없다.[3]

［참고］ **7 세기중반의 교유명사(물품명)의 일자일음(一字一音) 표기의 예**

「나니와(難波)」를「奈尓波」「那尓(你)波(婆)」등으로 한 음씩 표기하는데 이러한 고유명사에 대한 일자일음 표기법은 7 세기에 자주 보인다.

그림 6, 7 난파궁(難波宮) 터(전기 난파궁)출토목간[4] 2 점(전기난파궁터 북서부 골짜기에서 출토된 것)

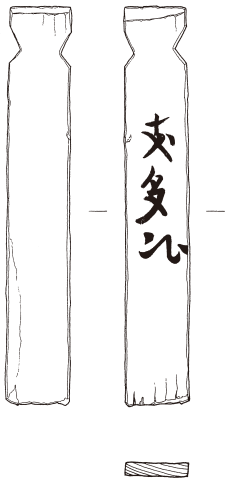


그림 6 「支多比」

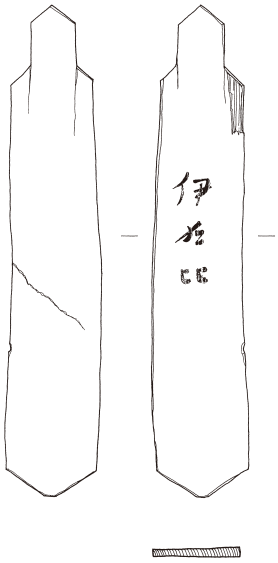


그림 7 「伊加比」

[『大阪府警察本部廳舎新築工事に伴う大阪城跡發掘調査速報難波宮北西の發掘調査』 大阪府文化財調査研究センター　2000 년]

그림 6 의「支多比」는『화명유취초(和名類聚抄)』어조류(魚鳥類)에서「木多比」로 표기하는「腊(きたひ 기타히 = 마른 고기)」를 의미한다.

그림 7 의「伊加比」는『화명유취초』귀패류(龜貝類) 에서도 똑같은 표기로「貽貝(いかひ 이가이 = 홍합)」을 의미한다.

②연공(連公)

(1)7 세기대 묵서명 번(幡), 목간에 보이는「연공(連公)」

가. 법륭사(法隆寺) 명과번[5] (命過幡)

「山ア名嶋弖古連公過命時幡」

그림 8 법륭사 명과번
[『法隆寺獻納寶物銘文集成』 東京國立博物館 編 吉川弘文館 1999 년]

가가노(狩野久)씨에 의하면 명과번의 간지(干支)연호는, 예를 들어「己未年十一月廿日 過去尼道果 / 是以兒止與古誓願作幡奉」의「기미년(己未年)」은 제명(齊明) 5 년(659),「신유년(辛酉年)」은 제명 7 년(661),「계해년(癸亥年)」은 천지(天智) 2년(663)으로 비정할 수 있다고 지적하였다. 또한 이「山部, 名嶋弖古連公」등과 같은 문장표현은 신해년(辛亥年), 즉 백치(白雉)2년(651)의 법륭사 헌납어물 관세음보살입상(法隆寺 獻納御物 觀世音菩薩立像) 의 명문에도「辛亥年七月十日記, 笠評君, 名大古臣, 辛丑日崩去」라고 있듯이 7 세기 대에 특징적인 것이라고 한다[6].

다만 가노(狩野久)씨의 견해에 대하여 토노(東野治之)씨는 간지 연호를 60 년 뒤로 비정하는 설을 제시하였다[7].

토노(東野治之)씨는「法隆寺獻納寶物の銘文」(東京國立博物館,『法隆寺獻納寶物銘文集成』, 1999 년) 에서도「山ア名嶋弖古連公過命時幡」의 자료 해설에서「法隆寺裂. 역시 7 세기말에서 8 세기 초의 것으로 추정된다.「山部, 이름은 嶋弖古連公」은 경의를 나타낸 표기이며『일본영이기(日本靈異記)』(상－ 5)에 보이는「大部屋栖野古連公」이라는 인명표기와 공통되는 특징이 있

다」고 지적했다.

그리고 법륭사 명과번에는「山部連公奴加致兒惠仙命過往□」와 같이「우지나(ウジ名, 씨족명)＋연공(連公)＋이름」이라는 표기도 있다.

나. 나라현(奈良縣) 이시가미(石神) 유적 출토 목간

(각서)[8]

□□□□□□□□「大家臣加□
□百代五十代□□□□□□□以蛭ア今女□
□步□大百代□□□□□□□乙里田知不
□□□□□□□□□□□□□石上大連公　」

(286)×(48)×5　081

세 편으로 분리. 주위 결손.

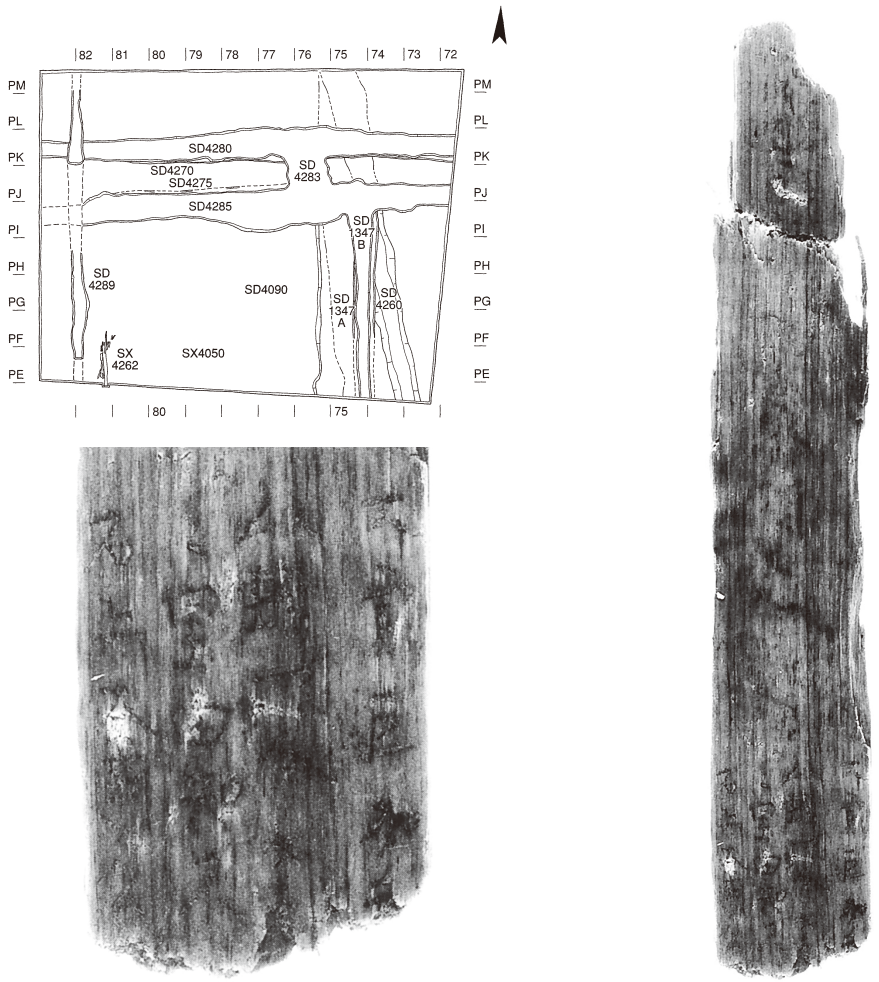


그림 9　이시가미(石神) 유적 출토 목간
[『飛鳥・藤原宮發掘調査出土木簡概報』(22)　奈良文化財研究所　2008년]

이 목간은「大家臣加□」등과 같이「石上大連公」이라고 하는 인명을 열기한다. 이름으로서의 石上의 예는「秦石上」(『大日本古文書』권 23-598, 三嶋子公解) 등이 있고「石上」이 우지나(ウジ名, 씨족명) 인가 이름인가라는 문제는 남지만, 인명을 열거하는 중에 연성(連姓)에만 존칭이 붙었다고는 생각하기 어려우며「연공(連公)」으로「臣」등과 같은 카바네(カバネ)적 표기였다고 생각하는 것이 타당할 것이다.

(2)8-9 세기 대에 작성된 사서(史書), 계보서(系譜書), 설화집(說話集), 문집(文集)에 보이는「연공(連公)」

가. 사서(史書)

『선대구사본기(先代舊事本紀)』권제 5 천손본기(天孫本紀)

七世孫建膽心大禰命. (중략) 弟大新河命. 此命. 纏向珠城宮御宇天皇御世元爲大臣. 次賜物部連公姓. 則改爲大連. 奉齋神宮. 其大連之號始起此時. (중략) 弟十市根命. 此命. 纏向珠城宮御宇天皇御世賜物部連公姓. 元爲五大夫一. 次爲大連奉齋神宮. 勅物部十市根大連曰. (중략)

八世孫物部武諸隅連公. 新河大連之子. (중략) 弟物部大小市連公. (小市直等祖.) 弟物部大小木連公. (佐夜部直. 久奴直等祖.) 弟物部大母隅連公. (矢集連等祖.) 已上三連公. 志賀高穴穗宮御宇天皇御世. 幷爲侍臣供奉. (중략)

十七世孫物部連公麻侶. 馬古連公之子. 此連公. 淨御原朝御世. 天下万姓改定八色之日. 改連公賜物部朝臣姓. 同朝御世. 改賜石上朝臣姓.

饒速日命의 7 세손인 大新河命은 纏向珠城宮御宇天皇(垂仁天皇) 때 大臣이 되고, 이어서「物部連公」으로 賜姓되어 大連이 되었다. 十市根命은 垂仁天皇 때「物部連公」으로 賜姓받아 원래는 大夫였는데 뒤에 大連이 되었다. 8 세손인 物部武諸隅連公 이후의 세대는 거의「物部○○○連公」을 칭하여 17 세손인 物部麻侶連公이 天武八姓의「朝臣」을 賜姓될 때까지 카바네는「連公」이었다.

『일본삼대실록(日本三代實錄)』권제 5 정관(貞觀)3년(861)8 월 19 일 경신조

十九日庚申. 左京人散位外從五位下伴大田宿祢常雄賜伴宿祢姓. 先是. 正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿祢善男等奏言. 常雄欵偁. 謹稽家諜. 伴大田宿祢同祖. 金村大連公第三男狹手彦之後也. 狹手彦. 宣化天皇世. 奉使任那. 征新羅. 復任那. 兼助百濟. 欽明天皇世. 百濟以高麗之寇. 遣使乞救. 狹手彦復爲大將軍. 伐高麗. 其王踰城而遁. 乘勝入宮. 盡得珠寶貨賂. 以獻之. 礒城嶋天皇世. 還來獻高麗之囚. 今山城國貊人是也. 狹手彦再使海外. 征伐兩國. 盡力絶域. 復立二國. 身尊當時. 功流後代. 但古人朴質. 除兩國盡力非私. 皆賜別姓. 是以子孫不得大部. 別賜大田宿祢. 而狹手彦之弟阿彼布古. 承父爲大部連公. 自斯而後. 恐子孫之不廣. 無復更賜別姓. 今阿彼布古之後. 歷代尊顯. 而狹手彦之後. 擧朱跋者. 曠世無聞. 一祖之枝. 榮枯殊隔. 沉淪之歎. 告訴無止. 常雄幸逢昌泰. 新參花轂. 門蔭中興. 寔爲榮慶. 刊大田兩字.

同歸於一宗．然則外不辱功臣之序．內方敦孔懷之親．善男等伏撿家記．所陳不虛．請刊彼兩字．直賜宿祢．控其支派入此本源．從之．

좌경인(左京人)인 伴大田宿禰常雄은 家諜(家牒 즉 집안의 계통도)에 의하면 伴大田宿禰는 伴宿祢와 조상이 같으며 伴金村大連公의 삼남 狹手彦의 후예라고 주장한다. 또한 伴善男 등의 조상인 狹手彦의 동생 阿彼布古는 아버지로부터「大部連公」을 이어받았다고 한다.

나. 계보서(系譜書)

『신찬성씨록(新撰姓氏錄)』[9]

(左京神別中)

大伴宿祢

高皇産靈尊五世孫天押日命之後也．初天孫彦火瓊々杵尊神駕之降也．天押日命．大押目部立於御前．降乎日向高千穗峯．然後以大來目部．爲天靭部．靭負之號起於此也．雄略天皇御世．以入部靭負賜大連公．奏曰．衛門開闔之務．於職已重．若有一身難堪．望與愚兒語．相伴奉衛左右．勅依奏．是大伴佐伯二氏．掌左右開闔之緣也．

佐伯宿祢

大伴宿祢同祖．道臣命七世孫室屋大連公之後也．(중략)

神松造

道臣八世孫金村大連公之後也．

(左京神別下)

石作連

火明命六世孫建眞利根命之後也．垂仁天皇御世．奉爲皇后日葉酢媛命．作石棺獻之．仍賜姓石作大連公也．

檜前舍人連

火明命十四世孫波利那乃連公之後也．

(右京神別上)

大伴宿祢, 佐伯宿祢 등은 다 室屋大連公의 후예라고 하여 神松造는 金村大連公, 檜前舍人連은 波利那乃連公의 후예라고 한다. 또한 그 표기형식은 賜姓된 경우에는 石作連과 같이「賜姓石作大連公」으로 되지만 성씨 계보의 조는 예를 들어 大伴大連室屋을「室屋大連公」이라고 하듯이 다「이름+大連公(連公)」으로 표기하고 있다.

『고옥가가보(古屋家家譜)』[10] (甲斐國一之宮　淺間神社所藏)

大伴 씨의 옛 계보라고 하는『고옥가가보』에서는 仲哀天皇을 靭大伴으로 供奉한 建持 이후 7 세기 후반까지의 인명은「이름+大連公(連公)」으로 표기되어 있다. 이 표기에 대하여 溝口睦子 씨는「연계(連系)씨족의 옛 본계(本系)를 보면 物部 씨의 본계나 中臣 씨의 본계에서 보이는 것과 같

(前略)
- 武日命
  磯城瑞籬大宮朝為大夫供奉．纒向日代大宮朝庚戌年秋，東夷叛．于時従日本武尊為将軍，於甲斐国酒 折宮，賜靫部．故負靫大伴連之姓．参河国賀茂郡狭投神社是也．
- 乎多氐命
  従日本武尊東征之軍，駐陸奥国小田郡島田邑，鎮東夷焉．是，靫大伴部・大伴行方連・大伴白河連等祖也．

- 建持連公
  足仲彦天皇朝，為靫大伴連供奉．
  息長足姫皇后征韓供奉．
- 蚊手連公
  是，五百木部・大伴亘理連等祖也．
- 阿古連公
  是，丸子部・道島宿禰・大伴安積連等祖也．

- 室屋大連公
  自遠明日香大宮至飛鳥八釣大宮五朝供奉．長谷朝倉大宮朝丁酉年十一月朔，為大連．
- 談連公
  朝倉大宮朝，征新羅之戰役，於彼地戰死．是，日奉連祖也．
- 長目連公
  是，大田部・白髪部祖也．

(中略)

- 長峡連公
  - 江人連公．
  - 稲人
    庚午年籍，負大伴山前連姓．淡海志賀大宮朝辛未年八月卒
  - 秋人
    同負大伴山前連姓．
- 弟古連公 (下略)

그림 10 『**고옥가가보(古屋家家譜)**』(甲斐國一之宮　淺間神社所藏)
[『山梨縣史』資料編 3　山梨縣　2001 년]

이「연공(連公)」을 쓰는 것이 본계에서의 정식 표기였던 것 같다」고 해석했다.(11)

다. 설화집(說話集)

『일본영이기(日本靈異記)』상권　삼보(三寶) 를 신경(信敬) 하여 현보(現報) 를 얻는 인연 제 5

大花位大部屋栖野古連公者，紀伊國名草郡宇治大伴連等先祖也．天年澄情，尊重三寶．案本記曰，敏達天皇之代，和泉國海中有樂器之音聲，如笛箏琴箜篌等聲，或如雷振動．晝鳴夜耀，指東而流．大部屋栖古連公聞奏，天皇嘿然不信．更奏皇后，聞之詔連公曰，汝往者之．奉詔往看，實如聞有當霹靂之楠矣．還上奏之．泊乎高脚浜．今屋栖伏願應造佛像焉．皇后詔，宜依所願也．連公奉詔大喜，告嶋大臣以傳詔命．大臣亦喜，請池邊直氷田雕佛，造菩薩三軀像，居于豊浦堂，以諸人仰敬．然物部弓削守屋大連公，奏皇后曰，凡佛像不可置國內，猶遠退．皇后聞之，詔屋栖古連公曰，疾隱此佛像．連公奉詔，使氷田直藏乎稻中矣．弓削大連公，放火燒道場，將佛像流難破堀江．然徵於屋栖古言，今國家起災者，依隣國客神像置於己國內．可出期客神像．速忽棄流乎豊國也．〈客神者佛神像也．〉固辭不出焉．弓削大連，狂心起逆謀傾窺使．(후략)

[岩波書店，古典文学大系]

『일본영이기』상권 제 5 연에 의하면 大伴連 등의 조상을「大部屋栖野古連公」이라고 하는데 문장 속에는「物部弓削守屋大連公」,「弓削大連公」,「弓削大連」으로 같은 인물에 대하여 다른 표기도 보인다.

라. 문서(文書)

태정관부안(太政官符案) (粉河寺文書,『平安遺文』353 호)

太政官符　紀伊國司

應免除粉河寺所領鎌垣東西村四至內雜役等事

在那賀郡

四至〈東限椎尾水無川弁財天　南限南山峯　西限風社柴尾門川弁財天　北限横峯〉

右得彼寺去永延二年十月廿日解偁, 謹案舊記, 此地白粉流水, 時現神變之相, 黃笠放光, 屢示希有之瑞, 点處而發願, 結柴而構庵, 未及人間之力功, 顯紫磨金之尊像, 以之稱粉河寺, 以之號自然佛矣, 于時大伴連公孔子古奉爲公家, 以去寶龜年中所奉造也, (중략) 依請者, 國宜承知, 依宣行之, 符到奉行

正曆二年十一月廿八日　從五位上守左少弁藤原朝臣說教

正六位上右少史物部宿禰

(하략)

영연(永延) 2 년(988) 10 월 20 일 해문(解文)에는 옛 기록(舊記)에 의하면「大伴連公孔子古」라고 하여「씨족명(ウジ名) +連公+이름」이라는 기록이 있다.

이상의 「연공(連公)」에 관한 여러 예를 검토한 결과 다음 세 가지 특징을 지적할 수 있다.

① 「연공(連公)」은 뒤의「무라지(連)」에 이어지는 카바네(カバネ) 의 앞 단계 표기라고 할 수 있다. 연공의 경우「우지나(ウジ名) +連公」과「(우지나 ウジ名) +名+連公」라는 두 가지 표기가 있다. 상술한「연공(連公)」혹은「대연공(大連公)」의 예들 안에는 법륭사 명과번의「山部連公奴加致」,『신찬성씨록』의「石作大連公」,『일본영이기』의「弓削大連公」, 태정관부안의「大伴連公孔子古」등과 같이「우지나(ウジ名) +大連公(連公)」,「우지나(ウジ名) +連公+이름」로 표기하는 것이 있는데 비교적 많은 표기는「이름+連公(大連公)」이라고 쓰는 것이다.

② 「連公」의「公」은 "連" 에만 붙여져 있는 것에 유의해야 한다. 관견으로는 "신(臣)", "군(君)", "조(造)" 등의 카바네에 존칭의「공(公)」이 붙여지는 경우가 없고,『신찬성씨록』에는 "신(臣)" 이나 "군(君)" 과 같이 연공이 사용되어 있다. 따라서 카바네 "連" 에 존칭「公」이 붙은 표기형식이라고 하기에는 문제가 있다.

③ 「연공(連公)」의 목간 등의 실례는 현 단계로는 7 세기 중반경(奈良縣 이시가미유적 출토 목간)에 한정된다. 또한 8-9 세기에 작성된 사서, 계보서, 설화집, 문서의 경우 예외 없이「연공(連公)」표기는 씨성(氏姓)계보의 "祖" 에 한정되어 있다. 이들은 각 씨족에 전래된 가첩, 본기, 구기와 같은 것을 이용해서 작성되었을 가능성이 있는 것이며 옛 표기가 그대로 사용되었다고 생각된다. 천무(天武) 9 년(680)부터 直, 造, 首 등 하위 카바네 씨족을 연(連) 으로 올리는 등 호족들에 대한 대규모의 카바네의 개성(改姓) 이라는 작업을 통해 천무 13 년 (684) 에 八色姓(야쿠사노 카바네) 이 제정되었다.

『일본서기』 천무천황 13 년(684) 10 월기묘삭조
冬十月己卯朔，詔曰，「更改諸氏族姓，作八色之姓，以混天下万姓．一曰眞人，二曰朝臣，三曰宿禰，四曰忌寸，五曰道師，六曰臣，七曰連，八曰稻置．」

이 기사를 통해서도「연공(連公)」은 7 세기 중반 이전의 표기이며 7 세기 후반의 천무 9 년 (680) 이후「연(連)」으로 통일되었다고 생각된다.

이 견해가 7 세기 중반으로 추정되는 이시가미(石神)유적 출토 목간을 포함해서 인정된다면 상술한 토노(東野治之)씨의 법륭사 명과번에 관한 견해 즉 간지년은 가노(狩野久)씨보다 60 년 뒤로 보고 명과번 명문「山ア名嶋弖古連公過命時幡」을 7 세기말에서 8 세기 초로 해석하는 것은 성립되지 않는다고 할 수 있다.

❸……「那尓波連公」과 인명만을 표기한 부찰의 유례

도래계(渡來系) 씨족인 나니와(難波) 씨는「難波吉士」를 칭했고 7 세기 후반『일본서기』천무 10 년(681) 정월 임신조에 의하면 草香部吉士大形에「難波連」을 하사하고, 천무 14 년(685) 6 월 갑오조에 의하면 「難波連」등 11 씨족에「忌寸」을 하사했다.

『일본서기』 안한(安閑) 천황 2 년 9 월 병오조
九月甲辰朔丙午，詔櫻井田部連 縣犬養連 難波吉士等，主掌屯倉之稅．

『일본서기』 천무천황 10 년(681) 정월 정축조
丁丑，天皇御向小殿而宴之．是日，親王諸王，引入內安殿．諸臣皆侍于外安殿．共置酒以賜樂．則大山上草香部吉士大形，授小錦下位．仍賜姓曰難波連．

『일본서기』 천무천황 14 년(685) 6 월갑오조
六月乙亥朔甲午，大倭連 葛城連 凡川內連 山背連 難波連 紀酒人連 倭漢連 河內漢連 秦連 大隅直 書連 幷十一氏，賜姓曰忌寸．

우지나(ウジ名)「難波連」은 천무조(672−687) 이후에 하사된 것이기 때문에「那尓波連公」은 상술한「連公」이 이름 다음에 오는 예와 같이「那尓波」가 이름이며「이름＋連公」으로 판단된다.

실제로『일본서기』에는「難波」를 이름으로 하는 예가 있다.

『일본서기』 흠명천황 31 년(570) 4 월조
是月，乘輿至自泊瀨柴籬宮．遣東漢氏直糠兒 葛城直難波，迎召高麗使人．

『일본서기』 민달(敏達) 천황 2 년(573) 5 월 무진조
二年夏五月丙寅朔戊辰，高麗使人，泊于越海之岸．破船溺死者衆．朝庭猜頻迷路，不饗放還．

仍勅吉備海部直難波, 送高麗使.

이 예들은 難波의 이름을 가진 사람이 고구려 사자에 대한 영접등 외교관계에 종사한 것을 나타내는 것이다. 인명이 직장(職掌)과 관련되는 비슷한 예로는 滋賀縣 野洲市 西河原유적군 출토 목간에「文作人石木主寸文通」이 있어 관직을 세습하는 경우 그와 관련된 인명표기가 있을 수 있다는 것을 알 수 있다.

인명만을 표기한 부찰의 예로서는 다음과 같은 것들이 있다.

가. 難波宮跡(前期難波宮—7 세기 중반)목간[12]

「<委尓ア栗□□」　591 × (16) × 2　081

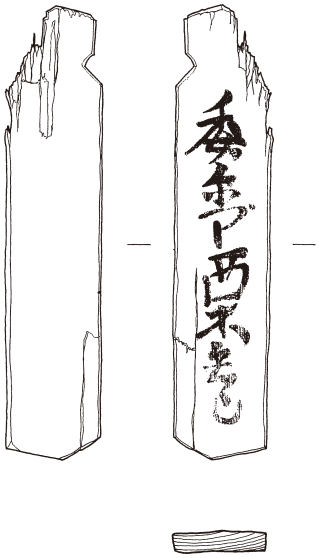


그림 11 「委尓ア」木簡
[출전은 그림 6, 그림 7 과 같다]

나. 平城京跡 二條大路 목간[13]

① 「<山梨連大足」　96 × 13 × 5　032
② 「<巫マ連眞君」　84 × 18 × 2　032
③ 「◦東」　27 × 15 × 4　022
④ 「<上次」　30 × 14 × 2　032
⑤ ·「◦秦万呂」
　·「◦山代乙」　35 × 16 × 3　022

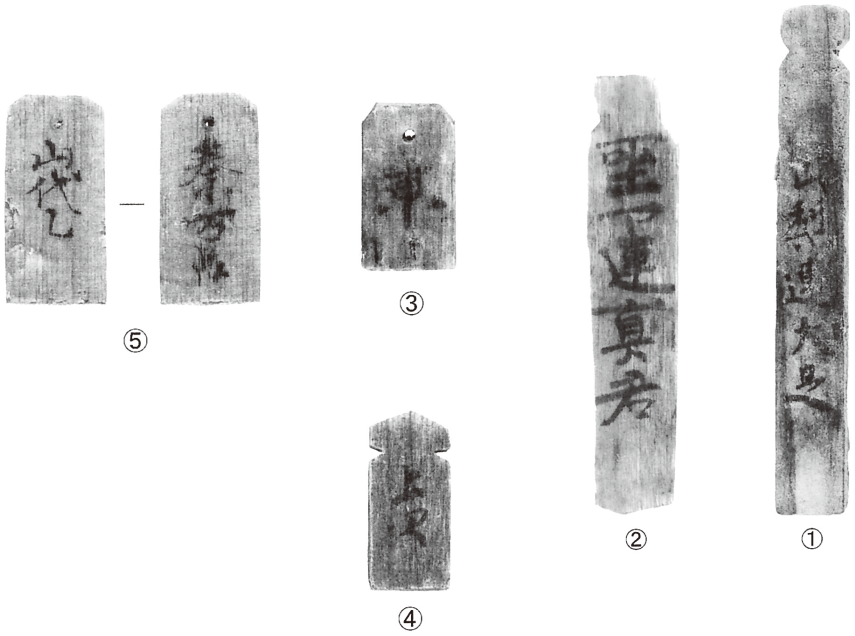


그림12 平城京跡 二條大路 목간
[木簡學會編『日本古代木簡集成』東京大學出版會 2003년]

①, ②는 둘 다 인명만을 적은 부찰이며 그 용도는 분명하지 않다. ③, ⑤는 매우 작고 규두상(圭頭狀)으로 만든 상단에 끈을 매기 위한 구멍이 있다. ⑤의 앞뒷면에 인명을 적었다.

다. 정창원(正倉院) 보물 명문[14]

箭 二隻(제 22 호)(중 6)
(1) 一隻(簳針書)「茨木」
(2) 一隻(同) 「日下マ佐□□」

獻物牌 五枚 竝木造 (중 66)
(1) 一枚「藤原朝臣袁比」 (背)「良賣獻舍那佛」
(2) 一枚「橘夫人」
(3) 一枚「藤原朝臣百能」
(4) 一枚「尼信勝」
(5) 一枚「尼善光」

獻物牌 二枚 竝木造 (중 108)
(1) 一枚「從三位〈藤原朝臣吉日〉」
(2) 一枚「橘少夫人」

獻物牌　木造　(중 121)
「藤原朝臣久米」　(背)「刀自賣獻舍那佛」

가, 나 목간 및 정창원 보물에 붙인 헌물패(獻物牌) 등의 유례에서도 소형으로 인명만을 적은 쌍북리유적 출토「나니파연공(那尓波連公)」목간을 물품부찰로 추정할 수 있다.

맺음 말

일반적으로「연공(連公)」은 문자 그대로「연(連) +공(公)」으로「공(公)」은 존칭으로 해석되고 있다.『일본서기』에는「연공」이라는 표기는 없지만, 웅략(雄略) 천황 9년 3월조에 의하면 大伴談連이 신라에서 전사(戰死) 했을 때, 그 종자가 주인의 행방을 물어「吾主大伴公、何處在也」라고 했다고 한다. 이「大伴公」이『고옥가가보(古屋家家譜)』에 보이는 大伴談連公을 가리킨다고 하면, 공(公)이 존칭으로써 연(連)에 붙은 거라고 이해할 수도 있다. 사실, 지금까지는 법륭사 명과번이나『일본영이기』의 씨족의 조상을 이야기할 때 보이는「연공(連公)」을 존칭, 경칭으로 이해해 왔다.

그러나 상술한 이시가미유적 출토목간의 사례는「大家臣加□, 以蛭ア今女□」등의 인명과 함께「石上大連公」으로 표기되어 있다. 또한,『선대구사본기』,『신찬성씨록』에서는 연(連)에만 공(公)이 붙어 있어 다른 카바네와 같이「連公」혹은「大連公」으로 표기되어 있다. 이들 사례로 보면「연공」만이 연(連)에 대한 존칭으로 해석할 수 없다. 아마도「연공」은 뒤의 천무팔성 중「연(連)」의 전 단계 표기였다고 생각하는 것이 타당할 것이다.

제 3 장에서 밝혔듯이 이「나니파연공(那尓波連公)」목간은 인명만을 적은 물품 부찰로 이해할 수 있다. 목간의 연대도 7 세기 중엽으로 추정되는 이시가미유적 목간「石上大連公」, 법륭사 명과번「山ア名嶋弖古連公過命時幡」과 같은 시기로 생각되어 1998 년의 쌍북리 유적 발굴조사의 소견(7 세기 중엽) 과도 일치한다.

마지막으로 이 목간이 고대 한국의 백제왕도(부여)에서 출토된 의의에 대하여 지적하고 싶다. 먼저 7 세기 단계의 왜국과 백제의 관계는 연표형식으로 640 년 이후를 제시하면 다음과 같다.

640 년　10 월…留學僧 淸安 學生 高向漢人玄理 등이 신라를 거쳐 귀국. 백제, 신라의 송사(送使) 가 내조(來朝) 하여 조공.
642 년　정월 …백제에 파견된 阿曇連比羅夫가 귀국.
2 월 …고구려, 백제의 사절을 難波에서 대우했다.
2 월 …고구려, 백제 사절이 귀국했다.
5 월 …백제국 조사(調使) 가 길사(吉士) 의 배와 함께 난파로 도착했다. 조를 진상 (進上) 했다.
7 월 …백제사절 大佐平 지적 등이 조공.
8 월 …백제사 참관 등이 귀국했다.
백제의 인질 達率 장복에게 소덕(小德) 을 수여했다.

643 년 4 월 …백제왕자 翹岐弟王子가 調使와 함께 내조.
6 월 …백제 조선(調船) 이 難波津에 머물렀다.
7 월 …백제 조공물을 검교(檢校) 했다.
이 해…백제 풍장(豊章) 이 三輪山에서 양봉(養蜂).
645 년 7 월 …고구려 신라 백제가 조공. 백제조사가 임나 조(調) 도 조공.
백제 사절에게 명령하여 鬼部達率意斯의 처자를 보냈다.
648 년 2 월 …삼한 (고구려, 백제, 신라) 에 학문승을 파견.
650 년 4 월 … [或本] 고구려 백제 신라 3 국이 해마다 조공하다.
이 해…安芸國에서 백제 배 2 척을 만들었다.
651 년 6 월 …백제 신라 조공.
653 년 6 월 …백제 신라 조공.
654 년 7 월 …西海使 吉士長丹 등이 백제 신라사와 함께 筑紫에 머물렀다.
이 해…孝德天皇이 돌아가서 고구려 백제 신라가 견사하여 조상했다.
655 년 이 해…고구려 백제 신라가 조공. 백제 대사 西部 達率 余宜受, 부사 東部 恩率 調信仁 등 100 여명이 내조했다.
656 년 이 해…고구려 백제 신라가 조공.
西海道 佐伯連 栲縄回 小山下 難波吉士國勝 등이 백제에서 귀국. 앵무를 헌상했다.
657 년 이 해…西海使 小花下 阿曇連頻垂, 小山下 津臣傴僂 백제에서 귀국했다.
낙타 한 마리와 당나귀 두 마리를 헌상했다.
658 년 이 해… [或本云] 경신년 7 월에 백제에서 사절이 왔다. 당 신라의 침공을 보고했다.
西海使 小花下 阿曇連頻垂가 백제에서 귀국했다. 백제가 신라를 공격하고 돌아가는 일을 보고했다. ——— 백제멸망의 전조
660 년 5 월 …나라의 백성들이 특별한 까닭 없이 병기를 가지고 돌아다녔다.
7 월 … [日本世記云] 춘추지(태종 무열왕)가 소정방(당의 무장)의 힘 을 빌어 백제를 멸망시켰다.
[伊吉連博德書云] 경신년(이 해) 8 월 백제 평정 후의 처리.
9 월 …백제가 달솔 沙彌覺從 등을 파견.
10 월…백제 좌평 鬼室福信, 좌평 貴智 등을 파견.
王子 豊璋 妻子, 叔父 忠勝 등을 백제로 보내기로 했다.
이 해…백제 요청으로 신라를 공격하기 위해 駿河國에서 배를 만들었다.
661 년 4 월 …백제가 鬼室福信을 파견하여 상표(上表) 해 왔다. 왕자 糺解(豊璋) 을 초청하는 것을 청했다.

그리고「記·紀」에 대해서 보면,『일본서기』,『고사기』를 보니『고사기』에는 백제파견씨족에 관한 기술이 매우 적지만,『일본서기』에는 6 세기 대 계체(繼體), 흠명, 민달조 백제파견씨족의 기사가 집중되어 비교적 많은 장군, 군사 및 견사(遣使) 재관자(在官者) 로 이름이 보인다.

이렇듯이 7 세기 중엽경의 왜국과 백제는 매우 밀접한 관계를 유지했다고 생각된다. 그리고 이 목간은 백제왕도(부여) 에서 출토된 것이므로 왜국과 백제와의 밀접한 관계를 전제로 두고서야 비로소 이해된다. 따라서 백제 멸망의 660 년 이후로 상정하기 어렵다고 한다면 목간의 하한연대는 660 년으로 하여 그 이전으로 볼 수 있다.

또한「那尔波」(難波)라는 이름은 왜국의 제일 중요한 항구인 難波 難波津에서 유래되어 그 이름을 가지는 자는 대부분이 외교관계에 종사했던 것이다.

따라서 이 목간은 7 세기 중엽경의 왜국과 백제의 밀접한 국제관계에서 보면 백제왕도 사비에 체재한 왜계 (倭系)관인이 백제에서 만든 목간이라는 가능성도 있다. 하지만 이 목간에는 상술했듯이 크게 다음의 세 가지 특징을 가지고 있다.

(1) 인명만을 적은 소형 부찰은 7 세기 중엽의 전기난파궁 목간 등 고대일본 목간에 많은 유례를 확인할 수 있다.
(2)「那尔波」의 표기는『일본서기』에 실린 고대가요에 거의 같은「那尔婆」의 예가 보인다.
(3)「연공(連公)」은 고대일본 7 세기 중엽 이전의 카바네의 특징적 표기다.

이상 (1)－(3) 의 특징을 가진 목간은 왜국 안에 있어야 그 유효성을 발휘할 수 있을 것이다. 왜국에서 만들고 조도물(調度物)에 붙인 하찰을 물품과 함께 백제왕도로 가져가서 백제 외경부[15] 소재지 남쪽에 있었던 관청으로 생각되는 곳에서 폐기된 가능성이 높은 것으로 판단된다. 앞으로 목간의 수종분석도 판단 요소의 하나가 될 것이므로 그 결과도 주목하고 싶다.

그리고 왜국에서 만들고 조도물에 붙인 물품부찰이라고 한다면 목간은 아니지만 정창원 보물의 좌파리가반부속문서가 거꾸로 전래된 경우(신라에서 일본으로)로 지적할 수 있다.

좌파리가반은 원래 좌파리라는 말의 유래가 신라에 있듯이 가반도 신라 특산품으로 생각되어 있다. 가반에 부착된 문서는 원래 관인 봉록을 관장하는 신라 관청에서 내려온 폐기문서로 보이며 신라의 공장부, 혹은 궁정공방에서 만든 가반을 포장하는 포장지등으로 사용되어 가반과 함께 일본에 가져온 것으로 추정되어 있다[16].

그럼에도 왜인(일본인) 이름을 적은 목간이 처음으로 한국에서 발견된 것의 의의는 매우 크다.

이 글을 쓰는데 仁藤敦史 씨, 中大輔 씨, 武井紀子 씨한테 귀중한 교시, 도움을 받았다. 감사를 드리고 싶다.

주

(1)――『平城宮木簡』1-769, 奈良國立文化財研究所, 1969 년.

(2)――『平城宮木簡』1-419, 奈良國立文化財研究所, 1969 년.

(3)――「ナ」「ニ」「ハ」음 표기에 관해서는 다음 표를 참조.

	記歌謠	万葉集仮名巻共通	木簡の仮名書歌(なにはづ他)	金石文	仏足石歌	正倉院仮名文書
ナ	那	奈	奈 / 奈那	那奈	奈	奈
ニ	尓迩	尓仁	尓 迩 / 尓(你)		尓	尓
ヌ	奴	奴			奴	奴
ネ	泥	祢		尼祢	祢	祢
ノ甲	怒	努		努	乃?	
ノ乙	能	能乃	乃 能 / 乃能 (之)	能	乃	乃
ハ	波婆婆	波婆	皮 波 者(泊)/ 波皮	披 半沛	波婆	波

乾善彦「歌表記の仮名使用」(第 30 回木簡學會研究集會「歌木簡とその周邊, 2008 년) 발표문 참고자료에서 작성.

(4)――『大阪府警察本部廳舍新築工事に伴う大坂城跡(その6)發掘調査速報 難波宮北西の發掘調査』(財團法人大阪府文化財調査研究センター, 2000 년).

(5)――東京國立博物館編『法隆寺獻納寶物銘文集成』吉川弘文館, 1999 년.

(6)――狩野久「法隆寺幡の年代について」(法隆寺昭和資財帳編纂所『伊珂留我―法隆寺昭和資財帳調査概報3―』小學館, 1984 년.

(7)――東野治之「法隆寺傳來の幡墨書銘―追善行事との関連にふれて―」(小松和彦・都出比呂志編『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』大阪大學文學部, 1995 년).

(8)――『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』(22) 奈良文化財研究所, 2008 년.

(9)――佐伯有清『新撰姓氏錄の研究』本文篇 吉川弘文館, 1962 년.

(10)――『山梨県史』資料編3 (原始・古代3 文獻・文字資料) 山梨縣, 2001 년.

(11)――溝口睦子『古代氏族の系譜』吉川弘文館, 1987 년.

(12)――주 (4) 과 같음.

(13)――각각 ①『平城宮發掘調査出土木簡慨報』31-17 쪽 하단, ②같은 책, 31-32 쪽 하단, ③같은 책, 31-37 쪽 상단, ④같은 책, 24-32 쪽 상단, ⑤같은 책, 31-17 쪽 하단.

(14)――松嶋順正編『正倉院寶物銘文集成』吉川弘文館, 1978 년.

(15)――백제왕도가 부여로 천도된 이른바 사비기 백제 내조는『주서』백제전 등에 의하면 내관 12 부제로 정비되어, 그 12 부 안에 내경부와 외경부가 있었다. 그런데 2008 년 쌍북리지구 발굴조사로 발견된 제 2 호목간은 다음과 같다.

外椋ア鐵
代綿十両 81 × 23 × 6

지금까지 중국 사서에만 기록이 있었던 외경부의 실재가 이 목간에서 처음으로 확인된 것이다(「扶余・双北里木簡」早稲田大學朝鮮文化研究所, 大韓民國國立加耶文化財研究所『日韓共同研究資料集 咸安城山山城木簡』雄山閣, 2009 년)

(16)――鈴木靖民「正倉院佐波理加盤付属文書の基礎的研究」(『古代對外關係史の研究』吉川弘文館, 1985 년). 李成市『東アジアの王權と交易』青木書店, 1997 년. 좌파리가반부속문서의 판독문 및 문서 성격에 관해서는 새로운 해석을 별고로 제시할 예정이다.

(국립역사민속박물관관장)

(2009 년 7 월 14 일 투고, 2009 년 8 월 19 일 심사완료)

(하시모토 시게루 : 학술진흥회 특별연구원〈동경대학〉)

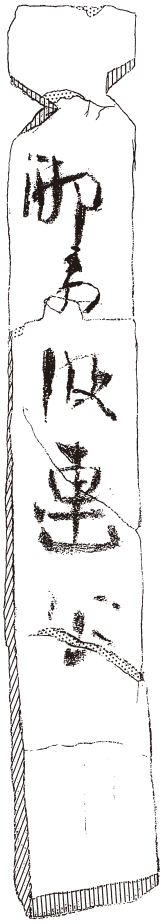


図３　文字部分の筆者による摸写

그림 3　문자부분은 필자에 의한 모사
[『한국의 고대 목간』　국립창원문화재 연구소 2006 년에 수록된 실물사진 자료를 토대로 한 모사]

図２　木簡の実物（右）と赤外線写真（左）
〔『韓国木簡展』図録　国立扶餘博物館　2009年〕

그림 2　목간의 칼라사진 (오른쪽) 과 적외선사진 (왼쪽)
[『한국목간전』 도록, 국립부여박물관 , 2009 년]